
裏独立アイドル艦隊奮闘記

山口多聞 P

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏独立アイドル艦隊奮闘記

【Nコード】

N5418Q

【作者名】

山口多聞P

【あらすじ】

八幡Pが連載中のアイマス架空戦記小説「独立アイドル艦隊奮闘記」。その製作の影において、2人の紳士が繰り広げた妄・・・ゲブンゲブン！熱き物語である。

なお、本人のプライバシー確保のために、一部ぼかしてある部分や、直接には関係ないため削除した部分があり、加工された真実であることを予め御了承ください。

また、一部？にアイマスキャラが登場してのドラマ仕立てになっている部分があります。

全ての始まり(前書き)

Special thanks 八幡P

全ての始まり

全てはここから始まった。

2010年12月7日。山口多聞Pの没ネタ集に掲載された1本の小説のプロット。作品名は「出撃！独立アイドル艦隊！空母「陸奥」ミッドウエーに参戦す！！」

山口多聞Pがふと思い浮かんだ、「アイドルマスターの个性的なキャラで、羅門祐人先生の独立愚連艦隊やったら面白いんじゃない？」と言う妄想のプロットを。取り敢えず公開したのがこの作品。

当の山口ですら、まさか以下の様な連絡が、わずか数日後に来るとは思わなかった。

ネタ集拝見致しました。

独立アイドル艦隊ですか、ありがたく使わせて頂きます。

……小説化は何時になるかわかりませんが。

12月9日、八幡Pより山口多聞Pへのメッセージより。

これは、「独立アイドル艦隊奮闘記」の製作をめぐって、2人の紳士が繰り広げた、遣り取りの一部を収めた物である。

全ての始まり（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお、当作品は八幡Pの「独立アイドル艦隊奮闘記」と平行して進みます。

キャラに遊ばれとるWWW（前書き）

題名はメッセージにつけられた件名の一つです。

なお作中のアイマスキャラへのイメージは、山口多聞の個人的なものであることを、予めお断りしておきます。

キャラに遊ばれとるWWW

独立アイドル艦隊は、市販戦記のパロディですけど、気に入ってもらえたのなら幸いです。好きに使ってもらって結構です。

12月9日 山口多聞Pより八幡Pへのメッセージ。

好きに使って結構とは……ありがとうございます。

人事をいじって良いものかと思案していたのですが、ひと安心です。雪歩かわいいよ雪歩。

むしろ、問題なのはどうしても先生の戦記に似てくることでしょうか。オリジナリティ出さないと……。

12月10日早朝 八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ

「と、ここまでは極々普通の遣り取りだった。だが、次のメッセージから遊び心が働き出す。」

雪歩のことすっかり忘れてました。配役は私も困ったんですね。飛行隊の伊織とやよい、航空参謀の美希は二〇動の影響丸出しだし……それから876もまなみと尾崎の配役が結局決まりませんでした。あと千早が空母艦長を目指してるのは、別に彼女のある部分とは関係なく……背後から寒気が……

12月10日朝 山口多聞Pより八幡Pへのメッセージ

「八幡Pもこれに負けず？ 以下の様なメッセージで返す。」

殺気を帯びた真クンと小鳥さんが今そっち行きましたよ。

しかし……、配役と出番の問題はありますね。何人が取っておかないと部隊が拡大したとき困るし、一度に出られるのは精々5人が限界ですし。

千早は駆逐艦戦隊長に異動させようかと。大丈夫、夢は叶えるから。（にやり）

え？ 「いじめるな」「愛は無いのか」ですか？

『愛じゃなくても愛してる♪』です。

12月10日昼 八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ

「そしてここから、新たな物語が始まる」

し、しまった……ええい腐れ鳥と男女が何だ！ 来るなら来てみやがれ！！

真

「それが最後のセリフですか？」

小鳥

「冥土の土産に痛くないようにして殺ってあげますよ。」

山口P

「本当に来やがった!？」

「アラーム!！」

12月10日お昼過ぎ 山口多聞Pから八幡Pへのメッセージ

「これに、八幡Pは紳士として返す。」

恵み溢れる聖ゆきぼ。Pはあなたと共におります。Pはあなたを選び、プロデュースし、あなたの婿まこちーもプロデュースされました。神々しき聖ゆきぼ、罪深い山口多聞Pのために、今も、死を迎える時も癒しをください。ゆりしー。

八幡P

「よし、お祈り完了。善永さん、事件だ取材に行くぞ。忘れ物はなにか？」

善永

「はい、ペン型拳銃も持ちました！」

今からそっち行きますね。

12月10日お昼過ぎ 八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ

「ここでしぶとく、ネタを引き続けるのが山口多聞クオリティー」

山口P

「さすがに罪悪を感じたので、3人にも配役をしておきましたよ。いやあ、没ネタ集なのにわざわざ改訂することになるなんて思わなかった。」

やよい

「あのー、なんで私がここに呼ばれてるんでしょうか？早く帰って夕飯を作らないといけないんですけど。」

山口P

「まあまあ、ゲストの高槻やよいさん。お礼に豚肉ともやしあげるから。これで炒め物でも弟さんたちに作って上げなさい。」

やよい

「うっうー！協力します山口さん！」

山口P

「ありがとう。」

やよい

「で、なんで私が呼ばれたんですか？」

山口 P

「アイマスキャラでああなたが一番マトモだから。」

やよい

「そうなんですか？」

山口 P

「だってそうでしょ？ 閣下と呼ばれて人を愚民扱いする春香、鬼畜と呼ばれる律子、ババアと呼ばれて人を殺しかねないあずさ、72と言うだけで怒り狂う千早、腐女子の小鳥。ツンデレでここらビームを発射するいおり、血まみれスコップ持ってうつろな目をして人に言い寄る雪歩、百合な真。そして双子の悪魔真美と亜美。社長だって黒いし。これで問題ないって言えます？」

やよい

「けど、私だって貧乏だし・・・」

山口 P

「いや、性格の問題ですよ。」

やよい↓山口 P

「でも、山口さんのイメージって主にニコ「それ以上は禁則事項です。まあ、否定はしませんが。しかし、あの動画のイメージって大きいですよ。善良王のジョージ6世が暗黒王になってますしね。」

やよい

「じゃあ、876の人たちは？」

山口P

「あの人たちもね。涼はまだ救いようがあるけど、絵理も黒いし、社長は内実ともにもっと黒いし、愛と舞はオーガだし。」

やよい

「じゃあ、貴音さんと響さんは？・・・あ！？」

山口P

「あの2人もなあ・・・宇宙人と動物バカだしなあ・・・」

やよい

「あ、あの。」

山口P

「こう考えるとアイマスキャラって問題ありすぎ。まあ、それが魅力でもあるんだが。」

やよい

「あの、山口さん。」

山口P

「うん？何かな？」

やよい

「後ろ、すごいことになってますよ。」

山口P

「へ？」

アラーム!!

退避!!

12月10日夕方 山口多聞Pより八幡Pへのメッセーじ

キャラに遊ばれとるWWW(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

伝家の宝刀は折れました

修正させてしまってますいせん。

なんか約1名漢がいるんですが……。ま、いいか。

「でもたちゃんは間違ってるってミキはおもうな」

こら、美希突然出てくるな。

「暗黒王の初出はニコ動じゃなくてh o i 2 A A R w i k iなの」

まあ確かに『大英帝国騒乱記』が元ネタだったはずだが……。些細なことだろ。

「うん。それよりみんなのこと悪く言うのは許せないってミキはおもうな」

そうだな。無個性は別に構わないが。

「某有名アイドル天海春香さん（笑）乙なのーww」

（ダースベイダーのテーマ）

「あらあ、楽しそうね？ 二人共」

げえ、春閣下！？

「『普通』如きが『天才』ミキに勝てるハズないの！」

そーだそーだ。やっちなえー。

「美希、おにぎり十個でどうかしら？」

「無駄な抵抗はやめるの。メインヒロイン二人に勝てるハズないってミキは思うな」

このゆとりめ、裏切ったな

12月10日深夜 八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ

「紳士たちの妄・・・会話はなお続く」

「いやあ、すっかりキャラに遊ばれてしまった。」

「と言うか生きてたんですね？」

「これは今日2人目のゲストである涼ちん。フッフ、文字の世界において、物語を書く作者は神なんだよ。」

「はあ…けど遊ばれたじゃなくて遊んだでは？」

「違う！俺の中で何かが囁いたんだ！だから遊ばれたで良いんだよ」

「はあ…けど八幡先生に突っ込まれたことは？」

「弁解は罪惡だ。それに関しては自分の無知を認め詫げるのみ。」

「じゃあ皆さんの悪口を言ったことは？」

「そっちは必要なし。だって事実じゃん。」

「ええ！？良いんですか？」

「じゃあ聞くけど、涼ちゃんは律子が鬼畜じゃないと？」

「それは認めますけど。」

「だろ？事実を把握するのは勝利への近道。ついでにさっき言い忘れたけど美希はゆとりでおにぎりバカだし、夢子も性格悪かったし：やっぱりアイマスキャラは何らかの人格に関する問題がある連中ばかり。愚連艦隊がお似合い。」

チャー・チャラ！

「「この音楽は！？」」

2人の後ろに素敵な笑顔の3人。

律子

「あんたたち好き勝手言ってくれるわね。」

美希

「これはお仕置きが必要だと、美希は思うな。」

夢子

「涼も同罪。」

テーレツテー!!

「ぎゃおおおん!!」

「叫んでる暇があったら、死にたくなかったら逃げろ!!」

「「逃がさない!」」

12月10日深夜 山口多聞Pより八幡Pへのメッセーじ

無茶ちやがって……。

涼ちん○んの英霊に く(・ω・) 敬礼!

「勝手に殺さないください」

おお、生きていたか涼。

「はい。で、構想は纏まりました?」

だいたいね。架空歴史は構築したから、あとは人事を決めて、兵器を考えて、妄想を添加(点火)したらおK。あとは書くだけ。

「何時?」

さあ? まず、こんなに早く反応があるとは……、それも作風がかなり好きな部類に入る人からくるとは思わなかったしね。アイマス恐るべし。

「えっへん」

で、この一連の会話のオチはどうしよう。

「H a l l o !でも歌いましょうか？」

やめてあげて！

12月11日夜 八幡Pから山口多聞Pへのメッセージ

「さすがにここまで来ると、伸ばし過ぎだろ？と、山口も思ったので、一先ず一区切りをつけることにした。」

「と言うわけで、このままでは無限ループになりそうなので、八幡先生の準備も整ったようだし、このメールで取り敢えずこの話題は切り上げと。」

「で、なんで僕が呼ばれたんですか？」

「こんばんは、ゲストの菊池真さん。君には重要な使命を頼もうと思っ
て。」

「ふーん・・・僕を漢として書いて、しかも男女ってバカにした人に義理立てなんかすると思うんですか？それとも、謝ってくれるんですか？」

「昨日も言ったけど、謝りはしない。だって事実だから。」

「殴っていいですか？」

「じゃあ聞くけど、君っていつもパンツスタイルで、私服でスカート姿なんてないよね？」

「ギクッ!？」

「女子からのラブレターの方が多いいんだよね？」

「ギクッ!？」

「そして1人称は僕で、涼にも男って間違えられたよねー」

「ギク!!」

「それじゃあプロデューサーも、涼も落とせないぞ!!」

「僕が一番気にしている事を、そんなストレートに言わなくても・・・」

「真実を認識しなければ勝てないのだよ真さん。そう、かつての日本軍のように。だが君はまだ若い!私のように大学4年の12月で内定を得られていないような人間とは違う!!これから希望を、そして夢を持って恋をして多感な10代を送るんだ!そんな君だからこそ、これから困難な小説作成にかかる八幡先生を励ませるんだ・・・それから、気にしているのならまだ変われる証拠だ。君自身を励ます意味でも、是非ともあの歌を歌って欲しい!!」

「・・・わかりました。それじゃあ、菊池真行きます！！曲は「まっすぐ」！！」

曲については脳内再生、もしくは動画サイトで視聴願います。

「それでは、八幡先生。小説書くのが・・・」

山口、後ろからやってきたアイマスキャラに踏み潰される。

「「「がんばってください！！」」」

12月11日深夜 山口多聞Pより八幡Pへのメッセージ

伝家の宝刀は折れました（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

紳士たちの会話は踊る（前書き）

今回の題名はメッセージの件名が平凡だったので、新規につけました。

紳士たちの会話は踊る

「12月15日。八幡Pの活動報告に独立アイドル艦隊の連載予告が載る。これに対して山口多聞Pがコメントを載せるが、相手を急かすような内容だったので、翌日謝罪を兼ねたメッセージを送る。しかしながら、それで終わらないのが2人の紳士の性である」

昨日は急かすようで失礼しました。

それにしても、千早が活躍ですか・・・デー〇ツツPの所でも千早大活躍でしたよね。ただ自分がアレだと言われてドーバー港侵入と言う危険を冒す神経はすごいですがね。そちらの作品でも、敵の誰かが俎板とか薄狼とか言って、いらぬ怒りを買うんでしょうかね？

あと、私が元ネタにした「独立愚連艦隊」なんですけど、夏くらいにコスミックから文庫版が出ていました。小さな書店にはないでしょうが、品揃えの良い店もしくはインターネットで簡単に購入できると思います。

また見つけるのが大変でしょうが、原版もしくは前回発売された文庫版には「陸奥」をはじめとする各種兵器の図板が載っていました。こちらはブックオフを探せば見つかるかもしれません。

また私の架空艦隊出撃せよでも一部取り扱っています。

では。朝からお騒がせしました。

12月16日朝 山口多聞Pより八幡Pへのメッセーじ

全然全く気にしてませんよ

千早は……我ながら配属が鬼畜なことになります。君の胸がフラッシュデッキだからいけないのだよ。

余計なこと言う奴はまだ考えてません。

情報提供ありがとうございます。でも、なんか別物になりそうな雰囲気です。

「ときに、山口さんはアイマスクキャラで誰がお好きなんですか？私は貴音・響・雪歩・美希あたりが……」

「そんなに巨乳が好きなんですか」

「げえ、AA72が出た！」

「Dあるもん！」

「ちょ、中身漏れてる！？」

12月16日深夜 八幡Pより山口多聞Pへのメッセーじ

「ここから話が脱線していくのも、2人の紳士の性……なのかな？」

私の場合特に好きなキャラと言うわけではなく、それぞれのキャラに好きな部分があります。例えると以下の様な感じですよ。

外見・・・貴音、雪歩

歌・・・真、愛、伊織、涼、千早、雪歩、小鳥、美希

キャラ・・・涼、高木社長

いずれにも掠りもしなかった人（絵理）、ごめんなさい。あ、それから。

アレなキャラ・・・千早、小鳥、あずさ

こんな感じでしょうか。

チャーチャラ♪

「何だこのBGM？」

後ろにワルサーP38を構えた千早

テーレツテー！

「お話は聞かせていただきました。アレなキャラで悪かったですね。行くわよ小鳥さん、あずささん。」

「「ヤボール！ヤカロイ！！」」

「て、こらあ！これは〇ーニッツPのワンシーンそのままじゃないか！」

チャキ（安全装置を解除した音）

「最後に何か言うことは？」

「待ちたまえ！話せば分かる！！」

「「問答無用！死ね！！」」

「それはペ〇ごPのネタだ！！」

パンパン！

12月17日早朝 山口多聞Pより八幡Pへのメッセーじ

「ペン〇Pやデーニツ〇Pは、ニコニコ動画でアイマス架空戦記を上げているプロデューサーである」

そうなんですか。

アイマスは比較的みんな違ってみんな良い、という所がありますからね。それが良い所です。

で、先生一体何回死んではるんですか（笑）
命知らずにも程があるかと。

何もなければこの辺で、それでは

12月17日昼 八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ

「2人の紳士の会話はなお踊る」

紳士たちの会話は踊る（後書き）

御意見・御感想よろしく願います。

それから八幡Pの本編もよろしく願います。

ミッション・・・真を宥めろ！（前書き）

今回は一部ネタバレなどのため、八幡先生と協議の上事前検閲を行い、公開不能部分を不許可として載せていません。悪しからず。

ミッション・・・真を宥めろ!

「ちょっと山口さん!!」

「なんだい菊池さん朝っぱらから? こっちは昨日バイトでいきなり大失敗して、しかも不合格通知を2通ももらってちょっとばかりブルーになっているんだけど・・・」

「いや、この会話書いているってことは一応心に余裕はあるんですよ? それよりも、八幡先生の活動報告が!」

《――以下八幡の活動報告――》

2010年 12月 25日 (Sat) 00:02:34

▼タイトル

艦攻はトロいから嫌い

▼本文

活動報告のタイトルって結構悩みませんか?

アイドル艦隊はどうしたと思われるかもしれませんが、ちょっと設定練り直しました。

《このあと3回設定を変えています》

寝る間際のメモ見直したらすごいこと書いてました。

結局、ボツにしたんですが、最終決戦でアイドル半分死ぬとか、いろんな意味でインフェルノ(地獄のような)だったりとか。どこの

ゼ○グラかと。

《あくまでもボツネタです。展開は相当変わっています》

で、紆余曲折の末、鹵獲艦名と第二世代艦攻以外はほぼ決まりました。

あとは書くだけ。その書くだけがどんなに時間がかかるか。

第二世代艦攻……43年中頃～後半。九七艦攻は流石に古い、流星改は少々無理がある。かと言って天山は安直、と。どうしょ。いっそ無しとか？（爆）

《あくまでもボツネタです。展開は相当変わって（ry》

『独立愚連艦隊』読みましたが……、ひどいですね。いろいろと。でも、一番酷いのはネタ集で打撃艦『由布』の艦長役に真を割り振った某作者だと思えます。

《『由布』は、『独立愚連艦隊』で、乗員がオカマばかりの艦として登場する。無論艦長も》

それでは

（公開）

2010年 12月 25日 （Sat） 03:16:07

▼タイトル

電波受信

▼本文

彗星艦攻

爆弾槽から斜めに魚雷が突き出ている。

どれだけ速度と航続落ちるやら。

(公開)

《コメントは省略》

「読んだよ。まあ、ガチに戦記を書けばアイドルが何人も死ぬのはおかしくないけどね。菊池さんは史実の太平洋戦争で、陸海軍軍人の戦死率がどれ位だったか知ってる？」

「いいえ。」

「海軍で16%、陸軍で20%だ。まあ、これは資料によって異なって別に両軍平均21%という数字もある。つまり5人に1人だ。もし765プロからの出演キャラが16人だった場合、最低でも誰か3人は死ぬ計算になる。」

「そんなに・・・」

「しかも、これはあくまで平均だ。レイテ戦のように上陸した7万5千の兵士の内、1千しか帰ってこれなかった例や、潜水艦のように全員戦死と言う例もある。時と場合によっては皆生きて帰れないと言うわけだ・・・これだけ見ても、戦争が悲惨であるとわかるだろう？」

「はい・・・」

「しかも、天災なら納得できなくもないが、戦争は人災なんだ。その点は忘れないで欲しい。まあ、小説において人を死なせることはジレンマにもなるけどね。」

「何故ですか？」

「やはり原作キャラのイメージは強いからね。例えば私が以前ハヤテのごとく！キャラで書いた「流浪の三千院家」シリーズでも、リアリティを出すために原作キャラに戦死者を出したら、やはり残念と言う意見が出た。かと言って人が死なないんじゃ、リアリティに欠けるしね。」

「なるほど。」

「まあ、後は読み手次第となる。二〇動のアイマス架空戦記で原作キャラを殺そうものなら・・・言わずもがなだよ。」

「確かに。この件はわかりました。じゃあ、八幡先生の（言っていた）艦攻については？」

「これも難しい問題だね。1943年頃には米軍の対空砲火が厳しくなつて、VT信管も発達するから、超低空からの雷撃は難しくなるんだ。架空戦記でも色々対応策はあるが、例えば高貫布士先生の場合誘導ミサイルを多用してこれを乗り切っている。他に電波妨害と言う手もありだね。まあ、根本原因は高速雷撃機の投入が遅れた日本海軍なんだけど。せめて南太平洋海戦で投入するのがベストだったんだけど。」

「小難しい話をされても・・・」

「ついでに言えば、八幡先生が言った彗星の雷撃機バージョン。実はこれ市販の架空戦記で既に出ているアイディアなんだよね。」

「そうなんだ。ところで、「由布」の艦長に僕になったことがどうして問題に？」

「・・・知らぬが華。」

「ええ！？うん？これは・・・」

「とにかく、今回はここまで。八幡先生からの返答を待とう。あれ、何読んでるの？あ、それは独立愚連艦隊の原作！！」

チャーチャラ！

「山口さーん！！」

テーレツテー！！

12月25日早朝 山口多聞Pより八幡Pへのメッセーじ

「八幡殿？」

「何ですか貴音さん」

《八幡P・貴音のセリフ 不許可》

「山口さんも言っている通り、戦争だからね」

「とはいえ、これは酷いのでは？」

「どうしました？ 音無小鳥」

《検閲により削除》

艦攻か……どうしよ。

《検閲により削除》

12月25日深夜 八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ

「八幡Pが色々と悩んでいる一方、真を怒らせた山口多聞Pはと言えば……」

「山口さーん！！あなた、僕のことを何だと思ってたんですか！？僕はホモでもゲイでもありません！」

「落ち着け！とにかく落ち着くんのだ！そうだ、素数を数えろ！！」

「1……2……3……4（死）……9（苦）」

「数字が物騒になっているぞ！それに4と9は素数じゃねえ。だいたい、私は君に関して偏見など抱いていない！むしろ……抱きたいくらいにいい女だと思っている！」

「え！？本当ですか？」

「ああ。そりゃ、多少ボーイッシュな所は認めるよ。けど、それはそれで君なりの魅力だと私は考えている。むしろ、その分可愛さも引き立つと言うか・・・」

「えへへ、ありがとうございます。」

（よっしゃ！宥められた）

心の中でVサインする山口。

「さて、とにかく落ち着いた所で新たなゲストを出迎えて八幡さんにお答えしよう。出でよ水瀬伊織！」

「何が出でよ、よ！全く、あんたも八幡もどうかしているわ！スーパーアイドルであるこの伊織ちゃんをこんな所に呼び出したり！」

「ごめんごめん。ただ、《検閲により不許可》は私もビックリだけどね。最初考えていた独立アイドル艦隊は、羅門先生の「独立愚連艦隊」をアイドルキャラに上手く置き換えるだけの予定だったからまあ、その分楽しみだけど。とにかく、今回は「彗星」の雷撃機バージョンについて。」

「全く、話をすり替えてるんじゃないわよ。けど、まあここまで来たから折角だし付き合っただけ・・・で、そのことだけど、「彗星」を雷撃機にするなんて不可能だわ。」

「何でだよ、伊織？」

「あのね真、機体の全長の半分以上ある魚雷を詰める筈がないですよ！」

「あ、そうか。」

「ハハハ・・・確かにね。しかしだね、これは発想の転換を行う必要があるんだ。さて、2人は米軍のF6F戦闘機は知ってるな？真も昨日1日で勉強したと思う。」

「はい。」

「あの機体、実は搭載武装の中に魚雷1本という公式データがあるんだ。」

「ハア!？」

「戦闘機にどうやって魚雷を積むのよ！」

「まだわかんないかな・・・あのね、アメリカの航空魚雷で、実は日本の物より1m以上短いんだ。」

「え!？そうなの？・・・ああ、そういうわけね。」

「小さい分、小さな機体に詰めるってわけか。けど、何で日本の魚雷より小さいんですか？」

「実はね、これは逆なんだ。日本海軍の魚雷は、戦艦を沈めるために世界標準よりも大きいんだ。これは爆弾も同じで、日本海軍の場合強力な徹甲弾を用意している。けど、アメリカの場合数で勝負できるから小型魚雷や汎用爆弾で事足りたというわけ。そして、太平

洋戦争で互いの主目標となったのは空母、巡洋艦、輸送船だ。こんな相手に戦艦用の魚雷や爆弾を当てても、あまり効果はない。薄い装甲のせいで貫通したり不発するからね。」

「うわー」

「予測と実際の結果が乖離しちゃったわけね。」

「この点に関しては、作家の林譲治先生が批判しているんだ。先生は自著の中で1人のプロよりも10人の凡人の方が戦力になると言っている。確かに効率の点から見て正解なんだ。そして連合軍はそれで枢軸軍に勝利したわけ・・・そして、林先生の「興国の楯」の中で彗星雷撃機バージョンが登場するわけだけど、その積んだ魚雷は小型の電池魚雷なわけ。確かに一撃必殺は無理だけど、10本、20本だと話は違うからね。しかも小型だから載せる機体の幅も広がって、なんと陸軍の屠竜にも積んでいるんだ。」

「だから発想の転換ってわけね。」

「納得。」

「わかればよろしい。」

と、そこへ新たな登場人物が。

「うっうー、おはようございます!」

「おはよう、やよいちゃん。けど、時間切れ!」

「ええ!?!」

やよいに出番は来るのか！？ つづく・・・かは八幡先生の返答次第。

12月26日早朝 山口多聞Pより八幡Pへのメッセージ

「この後一体どうなったかは、また次回」

ミッション・・・真を宥めろ！（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

それから本編もよろしくお願いします。

山有県米無郡粟稗村

「冗談ですが。あ、念のため言っておきますが、前の話はボツ案ですからね?」

「お、それ聞いて安心したぞ。その案では終戦は九月以降だって聞いたからな。」

「おや響さん。まあ、ガチ敗戦ルートでそれは……救いが無さ過ぎるよな。」

「沖縄戦も原爆も回避出来てないし、へたすりゃ北海道も大変なことになるぞ?」

「だよな……。メモには、ダウンフォール作戦 2nd T部隊 としか書いてないからわからんが。」

「自分のことなのにわからないのか?」

「うん。」

寝付く間際は本当に記憶が曖昧。

「で、普段お前アメリカのことなんて言ってたっけ?」

「『戦場の奇跡程度で勝てる相手じゃない』だね。アメさんのGP爆弾強すぎ。」

「GP?」

「汎用の意。ニッケル鋼できてるから薄くて強い弾体だし。反跳爆撃にも使えるとか。それを日本の150倍以上作る工業力が一番の脅威。」

「まさに鬼畜だぞ。」

「だろ？ まあ、アメリカの航空ドクトリンは敵艦の無力化であって撃沈ではないのも無関係ではないんだが、それでもな……。ま、『日本海軍の爆弾』の受け売りだが。」

「成程ね。あとは……、電池魚雷か？ そんなもんが日本に開発できるとは……。」

「ところがあるんだなそれが。しかもカタログスペックはドイツ製よか優秀。」

「マジで？」

「マジで。876潜水戦隊（仮）にも装備予定で調べたからね。」

「ふーん。でも、このスペックそのまま小型化したら1メートルくらいになるぞ？」

「だよね。と、いうわけで、詳しい航空電池魚雷のスペックわかりますか？」

「すぐわかれば、で良いから、宜しく頼むぞ。」

「さて、言うこと言ったし、次やよいっちも参加するらしいからこ

れ持って行ってきた。首都圏まで。」

「京都から何キロあるんだぞ？ 山口の所まで。あとその包みは？」

「生八つ橋ソーダ味。」

「なんだその……、面妖な八つ橋は。」

「本当にあるんだからちかたない。」

「12月26日昼 八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ」

響

「おいおい！京都から3時間掛けて山梨に来たのに、このタイトルはどう言うことだ！？」

（この時のメッセージタイトルが、今話のタイトル）

「いらっしゃい、我那覇響さん。いやね、これは家の大学の近現代史の先生が言っていた昔の山梨を表す言葉。山ぼっかで米なんかとれない貧乏だった時代を表す戯れ語だよ。ちなみに、日本人が皆白米を食べられるようになったのは、戦後からだよ。」

響

「あ、そうなんだ。ところで、何で真たちがどこか寂しげな表情をしているんだ。」

やよい

「実は今日新宿にある平和祈念資料館へ行って来たんです。」

真

「そこじゃあシベリア抑留とか、引き揚げのこととかが展示の主体で・・・本当に哀しくて。やよいと伊織なんか涙を流したしね。」

伊織

「全く、○○も年末にあんな所行く必要は無いのに。」

「ハハハ・・・いやね、青春18切符が余ってたから。アルバイトを始めて休日も限られているし。それに、3人にも是非知ってもらいたい展示ばかりだったからね。戦争に負けること・・・引いては戦争の悲惨さを改めて認識してもらえたと思う。そして軍隊が本来守るべきものもね。」

「「はい（うん）！！」」

響

「へえ、そりゃ御苦労なことだ。ところで、○○て？」

伊織

「山口の本名よ。」

「八幡先生が活動報告でややこしいと言ったからね、どうせ誰にも聞かれないから、メッセージでは本名で行こうと思う。」

響

「そうか、じゃああらためて。我那覇響だ。よろしく。」

「○○×だ。よろしく。クレグレも、○○じゃないからね。」

響

「りょうかい。ところで、これは八幡からのお土産だ。」

「あ、ありがとう。京都から疲れたでしょ。ハイ、ラムネ。」

響

「お、ありがとう！」

（ ）（ ）（ニヤリ）（ ）

響

「・・・ぶ！？なんだこれ！？凄い味だ！！」

「うん。だってそれ、浜松名物のカレーラムネだから。」

響

「カレー！何でそんな物が！？」

「いやね、近所のスーパーの物産展で買ったんだよ。」

響

「自分には合わないさ。というか、ワザと飲ませただろ。」

「ごめんごめん。じゃあ、代わりにシークワサージュースね。」

響

「お、こっちは好きだぞ！」

「実家に近い、名古屋の中心に沖縄物産店があってね。」

伊織

「和んでる所悪いけど、早く本題に移ってくれない？」

「ああ、ごめんね伊織さん。それじゃあ、肝心のことに話を移そう。先日言った電池魚雷は、確認した所重量500kgだった。だからかなり小型だね。」

真

「そんな小さな魚雷、役に立つんですか？」

「どうだろうね。商船や駆逐艦相手ならそれで充分だと思うよ。それに、爆発箇所がどこになるかで変わると思う。キールの真下なら効果大だよ。まあ、それ相応の装置か信管が必要だけど。ただこれは史実の帝国海軍も実用化したから大丈夫だと思う。」

やよい

「うっうー！○○さんに質問です！」

「はい、やよいちゃん。」

やよい

「魚雷以外で敵の船を簡単に沈められる方法はないんですか？」

「お、鋭いね。ただし、それは相手によるね。前回も言ったけど、戦艦用の爆弾や魚雷を空母や駆逐艦に使っても非効率、牛刀で鳥を割くようなものだ。まあ、汎用性がある物としては音響誘導魚雷とか、気化爆弾とかかな。」

伊織

「どっちも実現性薄いわね。」

「それは分からないよ伊織ちゃん。例えばアイドル艦隊のバックに水瀬財閥や萩原重工がバックアップしているとかなら、そう言う現実には間に合わなかった兵器も自力生産可能になるかもね。しかもアイドル艦隊だけに供給するなら、数も間に合うし。もっとも、そんな夢ある兵器よりも、レーダーや大口径対空機関砲、前投式対潜兵器みたいな現実的な兵器を造った方が100倍マシだろうけどね。」

真

「だよね。仮にそんなのがあっても、最終的にアメリカの国力の前に押しつぶされちゃうだろうし。」

「真の言うことは最もだね。あのリアルチート国家に勝とうと思ったら、戦前山本元帥が言っていたように、ワシントンまで行ってルーズベルトに拳銃突きつけるくらいしないと無理だね。」

伊織

「まあ、それが常識よね。」

「ただし、史実より上手く立ち回る方法は幾らでもあるよ。」

全員

「」「え!?!」「」

「確かにアメリカの国力はすごい。それに連合国という組織もすごい。世界大戦が終わったとき、日本は数十の国と戦争状態にあったんだ。ところが、単に国力だけ見たなら日本が開戦から1年も侵攻できる筈がないし、昭和20年に中国戦線で勝利をし続けるなんて

無理なんだよ。つまり、どこかしら抜け道は存在するんだ。残念なのは、史実の日本政府は敗戦間際にソ連に連合国との仲介を頼むって言う、戦後の冷戦構造を全く見据えることが出来ないほど、お目出度い人たちで固められていたことだね。」

伊織

「それは外交についてでしょ！？じゃあ結局戦いだけで歴史を変えるのなんて無理じゃない！」

「それはどうかな？」

伊織

「ハア!？」

「戦争と言うのは様々な事実が繋がった結果だよ。逆に言えば、一つの事象が他の事象に影響して全く別の未来を作る可能性があるんだ。確かに軍事単体で見ればそうかもしれないけど、軍事の結果、それが他に及ぼす影響。ここまで考えないといけないわけ。おわかり？」

真

「じゃあ山口さんの考えて、あの戦争で日本が上手く立ち回るにはどうするべきだと思いますか？」

「それについては色々考えられるが、この場合アイドル艦隊が存在する上でどう影響を与えられるかについて言及してみよう。まあ、長々と書いたわけだが、ちよつとこつちも疲れたから、続きで後で送らせてもらおう。」

やよい

「うっうー、また言いそびれました。」

「ごめんね。代わりに夕飯ご馳走するから。」

「12月26日夕方 山口多聞Pより八幡Pへのメッセージ」

遊んでいるようで、それなりに考えている2人の紳士であった。

山有県米無郡粟稗村（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

それから八幡Pの本編もよろしくお願いします。

旅順口にはぜひ鎮遠とか三景艦とかを

八幡

「うわ、どうしょ。」

千早

「確かに、冗談だったのに本名教えてもらうことになるとは思いませんでした。」

八幡

「いや、響がかえってこないから代わりに千早と絵理を出すことに……。」

千早

「そっちですか。9393」

絵理

「ネットで本名公開ダメゼッタイ？」

八幡

「気を付けてくださいね。あ、××と申します。○○さん、改めて宜しく願います。フルネームはご勘弁を。」

千早

「案外よくある名字じゃありませんか？」

絵理

「八幡さんはフルネームググって愕然としたことがある？」

千早

「相当珍しい名前なんですね。」

八幡

「ああ。千早という名前は見たことあるけど私と同じ名前は見たこと無い。」

千早

「それはそれは。」

閑話休題

千早

「良くネタになるのは『選挙』とかですね。」

八幡

「うん。現在のプロットでは、アイドル艦隊の最大の被害者は英国だし。」

絵理

「大英帝国涙目乙www」

12月26日夜 八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ

やよい

「うー、遅くなっちゃいました。」

真

「何とか東京行きの最終には間に合うけど、まさか見入っちゃうとは・・・」

伊織

「わ、私は別にあのアリアズナが羨ましいなんて、ちっとも思っていないんだからね!」

響

「あんな風に男から最後まで想われて見たいぞ。」

「ちょうどこのやり取りをしていた年末、NHKでは坂の上の雲第二部を放送中だった」

山口

「いやあ、アイマスカラが坂の上の雲に嵌っている光景、中々シユールだな。」

真

「で、○○さん。結局他にも言いたいことって何だったんですか?」

山口

「それはだね真。アイドル艦隊に編入できる艦艇や航空機についてだよ。すでに中国海軍の巡洋艦は含まれているみたいだけど、案外探すと色々な所にネタは転がっているもんなんだよね。」

真

「例えばどんなのが?」

山口

「手っ取り早いのは仏印の巡洋艦「ラモット・ピケ」かな? 太平洋

戦争末期に米軍に沈められたけど、それまでは武装解除されて係留されていたから、ヴィシー・フランスから購入するとか有りかもね。それと、南方地域の敵艦とかね。特に水上機母艦の「ラングレー」とか米軽巡の「マーブルヘッド」あたりはねらい目かな？」

響

「何だか海賊の話を聞いているみたいだぞ？」

山口

「しかしだね、響さん。捕獲というのは2重の意味で美味しい行為なんだよね。」

伊織

「そりゃそうよね。敵は艦を失うだけじゃなくて、相手の戦力を増やしちゃうんだから。」

山口

「そ、ある意味撃沈以上の大戦果になるんだ。アイドル艦隊はそれこそ海賊にでもなった方が良いかもね。」

真

「ええ！？それはちよつと・・・」

山口

「まあ、実際は敵も捕獲されないように必死に戦うだろうけどね。ただ市販の架空戦記でも捕獲艦を利用して艦隊を作る話は幾らでもあるんだ。橋本純先生の「超機動独立艦隊」とか、林譲治先生の「興国の楯」とかね。特に橋本先生の作品のアメリカ軍機が「敵はアメリカ艦なり」と打電するシーンは名シーンだ」

真

「アメリカ軍にとっては最悪の嫌がらせですね。」

山口

「あ、そうそう。やよいちゃんは結局何を言いたかったのか？」

やよい

「はい。この○○さんと八幡先生のやりとり、これだけで既に物語になっていますから、どこかで公開したらどうでしょう？」

「ハハハ・・・そうだね、制作秘話というところだね。ただし、これは八幡先生の許可を求めないとね。」

「ですよね。」

列車到着

「それでは4人とも気をつけて。」

やよい

「はい。」

伊織

「じゃあね。」

真

「お休みなさい。」

響

「元気でな。」

列車出発

「さて、今度は誰を呼ぼうかな・・・」

つづく・・・？

12月26日深夜 山口Pより八幡Pへのメッセージ

「そして、物語は続いた。」

あずさ

「あらあら。完全にバレてます。」

八幡

「私のノート、見いたあなあ？」

美希

「それは無いの。」

八幡

「dsyn。と、いう訳で、暫定データを公開。」

◇初期艦艇

空母 陸奥

打撃 多良・由布

軽巡 夕張

軽巡 ラモット・ビケ 名称未定

砲撃駆逐艦 4

雷撃駆逐艦 4

対空駆逐艦 4 (平甲板級)

仮装巡洋艦 3

潜水艦 1 (3)

他海防艦とか

◇鹵獲艦

空母 《不屈の》

〇〇 《7文字》

水上機母艦 《式号機の人》

重巡 ヒューストン

軽巡 マーブルヘッド

軽巡 《伏せ字》

軽巡 ヒューストン

軽巡 アトランタ

駆逐艦 数隻 (平甲板級)

駆逐艦 2 (〇〇〇〇〇級)

◇新規建造

空母 1

八幡

「ふう、何か質問は？」

あずさ

「やはり、〇〇が気になる、というのと、同じ名前の船があるような？」

美希

「あずさ、同じ名前は、多分アメリカによくある『7と18』なの。〇〇は……わかんないの。」

八幡

「ヒントは『面妖な』だ。それと、わりと艦艇に詳しい友人に〇〇の絵とスペックを見せたときの反応だ。」

友人

『なんじゃこりや、えらい半端な……。どこの艦？』

八幡

「〇〇さんなら絶対知ってる。少なくとも名前を見たことはあるはずだ。」

美希

「それが一番のヒントなの。文字数はわかってるから簡単なの。」

八幡

「ふふふ……。あと、少々、歴史をいじってから（軍縮 建艦計画 支那事変）始まるのと、日本名が全然決まって無い、と。」

美希

「表とエリーの台詞からみるに、少なくとも最初は通商破壊中心ってカンジ？」

八幡

「人によっては……んゝ……。のワの」

あずさ

「ところで、やよいちゃんの提案についてはゝ？」

八幡

「それ自体は面白いから、いくつか削除して欲しい所を上手く処理してもらえらなら問題無いけど……。」

美希

「けど？」

八幡

「何時小説を公開できるのか、ていう……」

美希

「多分やよいっちは『はよ書け』て言いたいの。これが所謂2525なの。」

八幡

「それは無いわ」

無いよね？

12月27日未明 八幡Pより山口多聞Pへのメッセーシ

「まだまだ2人の紳士の語り合いは続く。」

やよい

「うっうー！おはようございます。」

山口

「さすが朝早くから元気だね、やよいちゃんは。」

やよい

「〇〇さんも早起きなんですね。」

山口

「まあ、今バイトのために朝5時起きしなきゃいけないから。お陰で8時間の睡眠のために昨日は風呂に入りそびれたから、朝飯前に朝風呂だよ。」

やよい

「ところで、八幡先生からメッセージが来ていますけど？〇〇とか同じ名前の船が重複しているのが気になりますね。」

山口

「〇〇は多分戦艦だね。そして7文字だから、そこから考えるにフランスの「ストラスブール」か「ジャン・バール」イギリスの「ウオースパイト」が妥当だね・・・ただどっちとも艦船マニアの間じゃ有名だからね。どこの船？て言うってことは違うかもしれない。」

やよい

「じゃあ同じな名前の船は？」

山口

「アメリカ海軍じゃ沈んで間もない船の名前を新造艦につけていた

から、多分ヒューストン2世とかそう言う意味だと思う。ちなみにこの方法、沈んだはずの艦が通信に登場して日本軍を困惑させたりしいから、一定の効果はあったみたい。」

やよい

「なるほど・・・それから〇〇さんはまだ言いたいことがあったんですよね？」

山口

「そうそう。実は元ネタに下独立愚連艦隊の続きが来月文庫版で出るそうなんだ。さすがにスチャラカ架空戦記の伝道だけある。ただね、この作品批判も多いんだ。」

やよい

「そう言えば、八幡先生もヒドイって言っていましたよね？」

山口

「何せ「バーチャル艦隊の軍事力」という批判本（本当に市販された本で）に載った位だからね。特に打撃艦が批判の的だった。それから、展開もね。」

やよい

「やっぱり女の子が出たからですか？」

山口

「いいや、その点は問題ない。確かに今も硬派な人の中には萌は不要なんて言う人はいるけど、「スカーレット・ストーム」をはじめとして、今に至るまでその手の作品は続いているから一定のファンはいる。この本が問題にしたのは、愚連艦隊のオリジナル艦艇と出撃時期なんだ。」

やよい

「え！？オリジナルの船じゃないんですか？」

山口

「そう。批判本の中では、面白いキャラクターを史実の艦に乗せれば事足りるし、売れるようにオリジナルの艦艇や飛行機を出すのは読者をバカにしているって書いたんだ。ただし、実際の所オリジナルの艦艇を出した方が売れるって言うのは事実だけだね。同じコンセプトの作品で、オリジナル艦艇を全く出さなかった橋本純先生の「第七航空艦隊戦記」や鷹見一幸先生の「大日本帝国第七艦隊」はいずれも打ち切りや盛り上がり欠けて終わったからね。それに対して独立愚連艦隊が本編8作、続編4作、外伝2作だったから雲泥の差だよ。」

やよい

「本を売るって難しいんですね。」

山口

「今アニメでバクマンと言う作品がやっているけど、どんなに自分で好きなように書きたくても市場に左右されちゃうからね。哀しいかな、それが資本主義の現実なんだ。だからインターネット小説は気楽なんだよね・・・話を元に戻して。出撃時期も問題視された。」

やよい

「どうしてですか？」

山口

「あれだけの艦艇をどうしてミッドウェーまで使わなかったのかってことだよ。日本海軍は開戦以来艦艇不足に悩んでいたからね。例

えば昭和17年4月に設置された船団護衛部隊の第一海上護衛隊と第二護衛隊は両部隊合わせて護衛に使える船はたったの24隻。これはどうやって2000隻もの商船を護衛するのって話だよね?」「陸奥」とか打撃艦はともかくとして、駆逐艦とか巡洋艦は船団護衛や南方の攻略作戦支援に使ったほうがよほど効率的だよ。艦艇は停泊するだけで日に何トンもの重油を使うからね。」

やよい

「確かに使わないのはもったいないですー。」

山口

「私も以前「異次元世界大戦 独立艦隊海戦記」と言う作品を書いたけど、やっぱり開戦時から独立艦隊を使っているからね。まあ、そこは作家の力量にもよるけど。」

やよい

「八幡先生にもがんばって欲しいですー!」

山口

「そうだね。けど、ノートを見たなって・・・私はそんなことしませんよ!! 第一、私の場合小説書くのにプロットは書かないからね。」

やよい

「そうなんですか?」

山口

「基本的に頭の中で考えそのまま書いていく。設定とかは一度掲載した分をダウンロードして見直すから。この方法はアイデアが浮かんでいる間は機関銃のごとく投稿出来る。だから「ゼロ戦才人シ

リーズ」が続いているわけだけど、もしスランプ起こすと泥沼。」

やよい

「うわあああ・・・」

12月27日早朝 山口多聞Pより八幡Pへのメッセージ

「さらに、紳士の妄想・・・もとい熱い遣り取りはまだまだ続く」

八幡

「残念でした違います。」

《中略》

八幡

「で、流石に枢機卿は無いと思って……。一番艦だし。あと、そいつは仏艦は知らなかった。」

響

「ヒトラーの大盤振る舞いだな！ 此方のヒトラーも大概なことになる予定だぞ。」

八幡

「そこは『アイマス架空戦記だから』で。あと、（独立愚連艦隊への）批判については……。 （どう考えてもマトモに使えない）打撃艦はともかく、他はねえ。例えるなら……」

響

「例えるなら？」

八幡

「なんで千早はフラットなんだ！ て、怒るようなもんだろ（つまり、それはそういうものだろ、ということ）。」

美希

「よくわかったのw」

八幡

「元々、私が言った『ひどい』だって、『テラヒドスwww』みたいに、楽しみつつも……、だし。」

響

「しかし、オリジナル艦程度で批判されてもなあ。」

美希

「流石にそれは……なの。」

八幡

「ま、（アイドル艦隊で）史実に全く元ネタが無いのは打撃艦ともう一隻だけだが。」

貴音

「単用途駆逐艦（砲撃・雷撃駆逐艦）は違うのですか？」

八幡

「あれは一応、睦月級の船体設計を使ってることにした。航続伸ばして、機関かえて、速度が落ちた感じ。」

貴音

「あと、私はもう一隻が気になるのですが……。」

響

「貴音、それ、KYっていうんだぞ？」

八幡

「仕方ないじゃないか……。どうしてもやりたかったんだ……。それにはマル5では遅すぎるし、15000tは必要だったんだ……。」

千早

「くっ……。」

八幡

「さてと、言うべきことは言いつ、かな。そろそろ、書き始めましょうか。」

「「それでは」」

12月27日午前 八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ

＊注意 ここから先は山口多聞Pの妄想空間となります。

護衛艦の不足から、アイドル艦隊からも間合い任務として駆逐戦隊を派遣。船団護衛の現状を視察するためP（参謀長）もこれに随行する。ところが、船団指揮官の黒井大佐は高圧的であり、各艦の艦長や船長の顰蹙を買う。幸い船団は被害を出さずに内地へと帰還するが、後味の悪い任務となった。

「ただいま戻りました。」

「おお、御苦労だった。どうだったかね？船団護衛任務は？」

「はあ。幸い被害無しでした。しかし、船団指揮官とトラブルがありました。」

「ふむ。船団指揮官は誰だったのかな？」

「黒井予備役大佐です。」

「何・・・あいつか。」

「長官は知っているんですか？」

「ああ、私とあいつは兵学校の同期生だ。主席ではないが共に恩賜の短剣を賜った仲だ。」

「ええ！？あの人ですか？」

「あいつは筆記・実技ともに優秀だったからな。ただ、人の使い方には良く言えば淡泊、悪く言えば冷淡だ。海兵時代から教官に何度も注意されたが、結局直らなくてな。それでも成績のよさで大佐まではほぼ同じ昇進スピードだった。」

「それがどうして予備役に？」

「あいつが巡洋艦「羽黒」、私が「高雄」の艦長時代に悪天候下での訓練があつてな。その際に私は天候の悪化が予想以上なので訓練

前から中止を進言した。しかし奴は強行した。訓練が始まってからも天候はさらに悪くなり、奴の部下は散々即時中止を求めたが強行した。結果「羽黒」は駆逐艦「深雪」に衝突して「深雪」は沈没。「羽黒」は中破。その後査問会議で奴はあくまで命令に従っただけと言ったんだが、部下が全員奴に不利になる証言をしてな。それで奴は予備役入りさ。」

「そんなことが・・・」

「まあ、私も左遷同然でこの艦隊に送られたけどね。」

「なんで高木長官まで？」

「訓練前から中止を進言したことが、消極的・反抗的と見られたんだ。この艦隊に飛ばされ、昇進こそさせてもらえたが、もう10年間異動はない。」

「長官はそれで良かったんですか？」

「もちろんだとも、君や小鳥君、そしてたくさんアイドルや部下たち。彼女らに出会え指揮できて満足している。例えこの艦隊で死ぬようなことがあっても、悔いは無いさ。」

妄想終。

やよい

「何なんですか、これは？」

山口

「いやね、昼間突然ティン！と来てね。取り敢えず書いてみたんだよやよいちゃん。」

やよい

「そうなんですか？ところで、船団指揮官て何ですか？」

山口

「太平洋戦争中に日本は船団を組むようになったんだけど、その際に海軍から船団を指揮する人間を派遣したんだ。それが船団指揮官、正式には運航指揮官と言うんだ。その多くは予備役や応召兵だったらしい。だから山本長官とか中には鈴木首相と同期の人間位古参の人も参加したらしい。」

やよい

「そんな人たちまで出さないと足りなかったんですか？」

山口

「まあ、そう言うこと。だからアイドル艦隊も、色々と小間使いに使われるかもね。」

やよい

「覚悟しておきます。」

山口

「それからもう一つ。実は愚連艦隊の兵器の中に5式反跳爆弾と言うのがあってね、これは米軍のそれと違って爆弾倉内に爆弾を弾き出す機構が備わっていた。新書版の5巻に掲載されていました。ただ、見つけるのは難しいでしょうけど。それと、水瀬財閥とか萩原重工とか出して、オリジナル兵器の温床を作って置くべきだと思います。占領地の活用とかも手ですよ。・・・こちらからは以上です。」

」

やよい

「うっうー、楽しみにしています。」

12月27日深夜 山口多聞Pより八幡Pへのメッセージ

「取り敢えず、ここまで。」

旅順口にはぜひ鎮遠とか三景艦とかを（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

伊織

「こんな妄想のどこに意見を見出せばいいのよ。」

涼

「全くです。」

山口

「はい、そこ！突っ込み禁止！！」

名前は空母『千早』で……うわ何をす（ry

「年が明け、正月の騒ぎも終息し、仕事始めの頃。2人の紳士の熱き会話は微妙な方向へと舵を取る。」

如月千早

「題名は一体どのようなつもりで？」（9393）

「この時のメッセージの題名が、今回の題名」

八幡

「○○に○○さんが悪いのだよ（歌う○○より）」

千早

「くっ」

1月8日夕方八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ

山口

「ティン！と来た！」

やよい

「何がティン！と来たんですか、山口さん」

山口

「こんばんわ、やよいさん。実はだね、日本海軍には千代田と千歳と言う水上機母艦があったんだ。両艦とも後に空母に改造されたわ

けどが、「千早」と言う架空の3番艦があって、同様に空母として活躍させるなんていう、電波を受信したんだよ！」

音無小鳥

「なるほど。ということは、艦長は千早さんで決定ですね！」

山口

「これはお初にお目にかかります、小鳥さん。結婚おめでとうございます。」

小鳥

「それは嫌味ですか？」

「音無小鳥の声優である滝口樹里さんは、昨年結婚と妊娠報告を行いました。おめでとうございます。」

山口

「何を言っているんです？ニ〇動のシ〇ペー奮闘記では昨年ウエディングドレスを着て、プリ〇ン艦長と結婚したじゃないですか？そして中の人も結婚した年でもある。二重の意味でおめでたいじゃないですか。」

小鳥

「何か色々こじつけられたような気がするけど、確かに私が結婚したのは間違いないですよね！！」

山口

「そうそう。で話を元に戻しますけど、千代田級はフルフラットなんだね。」

小鳥

「なるほど、それでフルフラットの艦長指揮するフルフラット空母になるわけですか？」

山口

「さすが小鳥さん。」

山口・小鳥

「ハハハ・・・」

やよい

「あの、そんなこと言っていると・・・」

チャーチャラ！

小鳥

「このBGMは！？」

千早

「フルフラットの何がいけないんですか？小鳥さん？」

小鳥

「え！？追求されるの私だけ、山口さんは？」

既に姿見えず。

やよい

「とつくに逃げましたよ。」

小鳥

「ピヨオオオオ!!!????」

テレーッテー!!

千早

「覚悟はいいですか？」

小鳥

「・・・痛くないようにね。」

千早

「ええ、もちろん。痛いと感じる前に終わらせてあげます。」

P A M!!

1月8日深夜山口多聞Pより八幡Pへのメッセージ

八幡

「『千歳』じゃあ30機しか積めないじゃないですか。」

我那覇響

「じゃあどうするんだ？」

八幡

「響、千早といえど？」

響

「……、あーなるほど。そゆことか」

八幡

「そう。幸い、9で割りきれから不自然じゃない。

響

「多分千早は割りきれない思いだぞ？　それに、あんまりいぢめたら可哀想だぞ」

八幡

「ははは、上手い。まあ、千早はドMだから。どつかれて顔赤らめるコミュあるし。あと、こいつを見てくれ。どう思う？」

響

「なにになに？　軽巡『ラモット・ピケ』……排水量がWWW」

八幡

「とりあえずこいつに乗せようかと思う。」

響

「哀れWWW」

八幡

「なに言ってるんだ？　お前も名前でいぢるぞ。」

響

「えゝ」

当たり前だろ、響。それに、一人称や語尾に特徴あるキャラは使いやすいんだ。

1月9日未明八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ

山口

「そう言えば、響て沖縄出身なんだよね？」

小鳥

「て、人を置いてきぼりにして逃げ出しといて最初のセリフがそれですか？」

山口

「まあまあ小鳥さん。私が書いている世界なんだから、あなたが死ぬなんてあり得ませんよ。現に今も生きていますし。」

小鳥

「まあ、そうですけど・・・もう諦めます。で、響ちゃんが沖縄出身だと何が問題なんです？」

山口

「差別ですよ、差別。第二次大戦頃まで、日本本土では沖縄出身者は差別されていたんです。」

小鳥

「え！？そうなんですか？」

山口

「実際の程度だったかはわかりませんが、以前読んだ本だとアパートなんかのチラシに『朝鮮人・琉球人はお断り』という文句が普通にあったらしいですね。まあ、現代よりは風当たりが強か

ったのは間違いないでしょうね。」

小鳥

「うわああ・・・」

山口

「けど、逆に言えば響が活躍すれば沖縄の株も上がると言うわけです。当時の日本軍内部でも台湾や朝鮮出身ながら出世した人はそこそこいましたから。もつとも、それもこれも日本が負けなければの話ですけど。」

小鳥

「ううー。何時の世も勝てば官軍なんですね。」

山口

「少なくとも、1940年代はそうですね。当時の日本人は、その部分を履き違えて考えていたみたいだけど。」

小鳥

「しかし、そうなると私が功績を上げれば、その分腐女子向けの文化を早々と作れるわけですね。ようし！バリバリがんばりますよ！」

山口

「うーん、その点は八幡さん次第ですけど。その前に後ろの人たちを説得しないとね。」

小鳥

「ピヨ？」

特高

「失礼します、特別高等警察の者ですが。」

憲兵

「憲兵隊の者ですが。」

小鳥

「ピヨ!？」

1月9日夕方方山口多聞Pより八幡Pへのメッセージ

八幡

「あ、はい。宜しくお願いします。では」

ガチャン!

ガチャ!

小鳥

「はー、ひどいめにあったピヨ」

八幡

「おや、小鳥さん。どうしたんですか？」

小鳥

「ちょっと憲兵から逃げてきたピヨ。そっちは電話ピヨ?」

八幡

「まあ。しかし沖縄……、一応設定は考えてありますがね。そうい

えば、独立愚連艦隊にも水間一等兵だかいたな、と」

小鳥

「えーと、奄美出身の……プレイボーイ設定ですか。サイ……沖縄空手やってるみたいですね」

八幡

「響も沖縄空手の経験あるみたいな設定あったし、私自身もやったことあるからね、響には切り込み隊長みたいなことをしてもらおうかな」

小鳥

「で、手柄をたてて……ですか。日本は勝てるピヨ？」

八幡

「私としては（ネタ帳を見て）大勝利だと思うんですが、何時そこまで行くか」

小鳥

「ピヨ……、で、私は活躍するんですね？　それで801文化が……」

ドンドン

八幡

「お、来た来た」

小鳥

「ピヨ？」

ガチャ

N
K
V
D

「どーも。ヨシフおじさんのNKVDでーす」

小鳥

「ピヨォー!？」

1月9日夜八幡Pより山口多聞Pへのメッセーじ

「話の方向がおかしくなり始めたので、ここでとりあえずお開きとなりました。」

名前は空母『千早』で……うわ何をす（r y（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

明日からアルバイトをすることになりましたので、今後小説の更新速度が遅くなる可能性があります、悪しからず。

わーい／＼（＾－＾）／なかーま

さて、柄にも無いこと言ってしまったのでネタを一つ。

八幡P

『真の海防』を、『まことのかいぼう』と読んで、「なるほど、真が通商路を守るのかー」なんて……ね。

美希

「それより『アイドル艦隊』はいつ公開するのかな？ かな？」

「この時点で、アイドル艦隊はまだ構想段階であつた」

八幡P

「とりあえず目に光を戻して星井」

美希

「ミキ的には早く公開した方が良いつて思うな」

八幡P

「……………それではまた」

美希

「ちょっと待っ」

1月14日未明の八幡Pより山口Pへのメッセージ

やよい

「大変ですよ山口さん！」

山口P

「どうしたんだい、やよいちゃん？」

やよい

「さっき埠頭の方で、美希ちゃんとその部下の人たちが八幡さんを必死に探していました。しかも「あいつ、シンボクカイだ!!」て。」

山口P

「親撲会か・・・八幡さん魚雷発射管か砲身に詰められないといいけど」

やよい

「気の毒です」

山口P

「そりゃあ、私も早く読みたいけど、焦って質の落ちた作品読むよりは、本人が納得した出来の作品の方が良いからね」

やよい

「うっうー！がんばってください!!」

「ちなみに、親撲会の意味を知りたい方は、ニコニコ動画のサイレントハンター動画を見てみましょう」

1月14日夜 山口Pより八幡Pへのメッセージ

美希

「と、いう訳で黒くしてみたの！」

「この少し前1月18日の八幡Pの活動報告を通して、美希の髪の色について山口Pは黒い美希も見てみたいと発言している。その内容は以下の様な物であった」

文章見直しとかしてたら以下のような問題がw

- ・艦船の大半が名無し
- ・軽巡に『千曲』と命名してた
- ・1人金髪のキャラがいたのを思い出した

1番上は良いとして、2番目……、利根級の『筑摩』の筑摩川って千曲川の別名だったんですね。
初めて知りました。

で、最後。

当時の日本（しかも海軍）で金髪は不味くないかと。
でも、こいつから金髪取ったら覚醒しちゃうんですが。
最初から覚醒か、誰も気にしない世界観にするか……？

「対する山口Pの書き込みはといえば」

艦船の名前は、当時の軍艦の命名基準と、日本地図、そして辞書と睨めっこしながら考える方法がありますよ。私の場合は、だいたいい架空戦記で使われた名前とかを使いますけど。

それと、金髪ですけど確かにヤバイかな・・・ただし、地毛か染めるかにもよりますが。まあ、二次創作なんだからそんな細かいこ

とは気にするなとも言えますけど。

ある意味、Mさん（美希）の黒髪も見たいかも。

「話は再びメッセージへ」

八幡P

「うん、響と被ったな！　というか『見たい』てことは……」

美希

「山口様が見たいと仰せなの」キリッ

小鳥

「描いて差し上げるピヨ」ピヨッ

八幡P

「マジデスカ……」

さて、問題の艦名ですが……

1、だってアイマスだしね『十勝』

2、まあ無難に変わり種を『五ヶ瀬』

さあ、どっち！？

ちなみに、私は命名慣例は遵守する派で、1と2での物語の違いは無線の煩雑さと沈んだ時の後味のみです。

1月18日　八幡Pより山口Pへのメッセージ

山口P

「黒髪美希か、まさか本当になるとは？」

やよい

「山口さんはそういう趣味なんですか？」

山口P

「いや、別に金髪萌え！とか、黒髪萌え！と言うわけじゃないんだけど、タマにはイメージの違うキャラも見たいなと思って。他にも眼鏡のない律子とか。」

やよい

「私はどうですか？」

山口P

「うーん・・・やよいちゃんの場合、髪よりも服装かな？普段は子供っぽいから、たまには大人びた格好をしたら面白いかもしれないね。軍人と言えば、普段は飛行服ばかりだけど、タマにピシッと第二種軍装を着こんでいるとかかな。」

やよい

「なるほど・・・じゃあ、艦名については？」

山口P

「そうだね、どちらもそれなりに味があって良いかな？ただね、どんな艦（あくまで見方ですが）でも沈めば後味はわるいさ・・・」（遠い目をして言う）

やよい

「・・・」

1月18日深夜 山口Pより八幡Pへのメッセージ

八幡P

「3、特設巡洋艦『多聞丸』で」

美希

「その目は冗談いつてる目なの」

八幡P

「バレたか」

美希

「当たり前なの」

八幡P

「あと、絵についてですが、雪歩の誕生日までには……」

美希

「絶対描く気無いの……」

クオリティ含め、期待しないで待たないでください。

1月18日深夜 八幡Pより山口Pへのメッセージ

「この話題が具体的にどうなったかは、1月19日付けの八幡Pの活動報告でわかる。内容は以下の通り」

先日行われた有識者懇談の結果、八幡脳内サミットで以下の議題について結論が出されました。

・艦名について

↓最早自重する意味は無い

よく考えたら唯一決まっていた艦名が艦名だから迷うことなんて無かったんですね。

・髪色について

↓初期は金髪とする

直接の原因は第一種軍装・黒髪で描いてみたら若い頃の石川実876社長になったから。
理由は後で考える。

「そして再びメッセージによる会話へ」

山口P

「ハハハ、八幡さんは冗談が上手いな」

やよい

「ですね。ところで、山口さんの方はどうですか？」

山口P

「そうだね。今日はゼロ戦才人を更新したから、次は交差する世界を更新する予定だけど、いい加減真の海防にも手を付けた方が良さだろうし・・・けど、アイマスの短編も考え中だし。」

やよい

「うっうー！それは私が活躍する話ですか？」

山口 P

「ごめん、違う。多分男臭い話になる。」

涼

「ええー!?!」

「この時の話題にした短編は、知らぬは本人ばかりなり Pと涼」として完成」

1月18日深夜 山口 Pより八幡 Pへのメッセージ

八幡 P

「アナログ絵完成しました」

響

「流石美術選択だぞ」

八幡 P

「あれは人前で演奏したりリコーダーの練習したりが嫌だから美術にしたんだが……、役にたつな。案外」

響

「学校の授業は絶対どこかで役にたつぞ」

八幡 P

「だな。アイマス短編で男臭い話………、木製じゃなきゃなんでもいいです(爆)」

響

「マジで爆弾発言だなおい」

八幡

「いやまあ構わないんだけど、もっと適役がいるだろ常考」

東豪寺麗華

「俺たちがいるのに何やってるんだバンナム！」

三条ともみ

「パーソナルネーム ガミPを敵性と……」

八幡P

「ともみ、それ三条ともみ違う長門有希や」

東豪寺麗華

「『魔王 エンジェル』がいるじゃないか！」

響

「おー」

八幡P

「最近、マジでリレーションズを密林で注文しようかと」

美希

「いまんとこ、手元にあるのは『ぷちます！』だけなの。だから、なのなのだぞだぞピヨピヨ言ってるの」

1月19日未明 八幡Pより山口Pへのメッセージ

山口P

「くそう、情報が、情報が欲しい！」

真

「何を騒いでいるんですか、山口さん。」

山口P

「実はだね真さん。私アイドルマスターをやったことないんだ!!」

真

「ええ!?! それなのにアイマスの2次を作っているんですか？」

山口P

「うん。厳密には全く知らないわけじゃなくてね、ニコ動とか他の方の二次創作とか、漫画版は読んでいるんだ。けど、実際にプレイしたことないんだよね・・・」

真

「そんなに大丈夫なんですか？」

山口P

「多分、大丈夫。だって今まででもそうやってきたから。けどさあ、やっぱり情報が不足しているのは否めないんだよね。」

真

「情報は今の時代重要ですからね。」

山口P

「今の時代じゃなくても、戦争なんかじゃ重要だよ。一つの電報の行き違いで、数万の命を危険に晒すんだから。」

真

「うー、シビアだなあ。」

1月19日朝 山口Pより八幡Pへのメッセージ

山口P

「やっちゃった!」

やよい

「はわわわ。山口さんマズイですよ。」

「この少し前、アップした短編で岡本まなみさんの名前を間違えるミスを犯す」

山口

「名前を間違えられるのは嫌なことだからね、やよいちゃん。そんなまなみさんへの贖罪として、まなみさんがハッピーエンドになる動画発見!!」

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm11144555>

やよい

「おお!けど、これ相手が「それ以上言っちゃだめ!!」」

ついでにオマケ

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm9277947>

1月19日夜 山口Pより八幡Pへのメッセージ

山口P

「昨日は報告への書き込みありがとうございました」

「ちなみに、1月24日の山口Pの活動報告は以下の様な物」

2週間前の日曜日から「かみちゅ」がやっているので、録画して今日になってようやく見ることができました。

このアニメ、戦艦「大和」が登場するのでミリタリークラシックスでも取り上げられた作品です。

今回もそれをお目当てに見始めた（ゼロ魔のゼロ戦と同じパターン）のですが、中々普通のアニメとしても見るべき点がありますね。

尾道の街の描写やキャラクターも然ることながら、神様の描き方が如何にも日本的で良い。

日本の場合万物に命が宿り、無数の神が存在する八百万の神々の考え方ですからね。だからこそ、艦魂とか擬人化を考え出すのに便利なのかも・・・

「これに対する八幡Pの書き込みはと言えば」

『ハヤテの如く』と聞いて四式戦『疾風』が出ると勘違いしてがっかりして、ゼロ魔を「どうせ魔法の素質ゼロとか零点ばかりとかそんな話だろ」と見向きもしなかった私が通りますよっと。

「以上の問答を考慮して読み進めるべし」

真

「それにしても、山口さんも八幡さんもアニメをどういう感覚で見ているんですか？」

山口P

「まあね真ちゃん、多分普通の感覚ではないと思う。基本的に私の場合は、ミリタリーか鉄道要素があるかないかで、選別するよ」

真

「どんだけオタクなんですか!？」

山口P

「これは子供の頃から変わらない性癖だから。昔小学生の時に授業で『銀河鉄道の夜』と言う作品のアニメを見たけど、銀河鉄道と(題名に)つくのに列車がほとんど出てこないから失望した記憶があるね。逆に銀河鉄道999は今でも夢中で見るよ」

真

「筋金入りですね」

山口

「ただ、全部が全部そう言うわけじゃないけど。今でもバクマンとかイカ娘とか、普通のアニメも見ろし。まあ、数はすくないけどね」

真

「山口さん、友達少ないんでしょう？」

山口P

「ヤカマシイ！例え少なくとも、濃い面子が集まってるからいいんだよ」

真

「そうですか・・・アイマスだって、元はニコニコ動画の架空戦記から入ったんでしたよね？」

山口P

「まあね。それが今じゃノベルズマスターに熱を上げているまでに嵌り込んだよ」

真

「その（アイマスの）キャラとしては、喜ぶべきか悲しむべきかなの」

山口P

「まあ、どっちもどっちだろうけど。そのノベルズマスターも最近凄い作品が一杯あるし。具体例をあげると以下の感じかな？」

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm13202439>

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm11810206>

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm10107138>

「この小説を呼んでいる皆様にもおススメです」

真

「八幡さんは携帯でやっているみたいでしたけど。」

山口P

「うん、そこが気になっているんだ。けど、右子や中子の登場、千早の弟生存、その他のキャラの親類縁者登場は中々に面白い。」

真

「うー、僕の影が薄くなる。」

山口P

「大丈夫大丈夫、固有のファンがいるから。それにほら、2だとイメージも変わったし。一行に成長しない千早よりは有望でしょ?」

真

「で、ですよね。」

山口P・真

「「ハハハハ・・・」」

ガチ（↑撃鉄を落とした音）

山口P・真

「「!?!?・・・千早!?!?」」

千早

「お話は全部聞かせていただきました。悪かったですね、一行に成

長しなくて。成長したくなくてしていいわけじゃありません・・・
まあ、そんなこと私は一行に気にしないけど。」

真

「気にしてる癖に!!」

山口P

「落ち着け! 話せばわかる!!」

千早

「問答無用!!」

パンパン!!

1月25日夕方 山口Pより八幡Pへのメッセージ

八幡P

「良作紹介ありがとうございます」

美希

「ありがとうなの!」

八幡P

「ニコニコでの携帯とパソコンの違いは3割くらいの確率でプレミアム会員しか見れないこととか」

美希

「でも右子とあずさ弟Pのは見れたの。これからもティンときたら

教えて星井な」

八幡 P

「こら厚かましい」

美希

「……おにぎりなの〜!」

八幡 P

「なの〜。ところで千早の扱いだが」

美希

「千早さんの扱いなんてどこでも大体一緒なの」

八幡 P

「そうそう、大体どこでも貧乳ネタだよな」

八幡 P・美希

「「あはハハハ……」」

八幡 P

「ってあれ? デジャヴ……?」

美希

「なの……」

がしゅん（軽機関銃装填音）

八幡 P・美希

「千早^{さん}!？」

千早

「お話は（r y」

（中略）

八幡 P

「待て、話せ（r y」

千早

「問答（r y」

パタララララ

「この頃、既にあの戦いへの種は蒔かれていたのかも知れない・・・」

1月26日深夜 八幡 Pより山口 Pへのメッセージ

わーい／（＾－＾）／なかーま（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

詐胸海戦勃発!?

山口

「最近千早の凶暴化が問題になっています」

涼

「前回、僕たちも危うく殺されかけましたね」

山口

「ああ、危なかったよな。やよいちゃんは思う？」

やよい

「千早さんが怖くなっているのは認めますけど、あんまりイジめるのも可哀想なんじゃ？」

真

「けど、凶悪化が最近目に見えてひどくなってない？」

山口

「真の言うとおり。私は鉄道好きだからA列車の動画も見るんだ」

真

「僕も参加していますよ」

山口

「その中で、千早がPC枕木でup主を殴りつける事件が・・・」

真

「ああ、あれは僕もビックリでした」

やよい

「PC枕木って何ですか？」

山口

「コンクリート製の枕木のこと。何でもそのシリーズの千早は72という数字を言った人物を、枕木をぶん回して殴りつけるらしい」

涼

「もう人間のレベルじゃないですね」

山口

「まあ、これ以上言うともた彼女が現われるので・・・今度からは響を苛めよう」

真

「それ何か間違っている気がします!!」

やよい

「山口さん、最近黒いですー」

山口

「ハハハ・・・それはさて置き。八幡先生に紹介したノベマスが好評だったのは良かった。」

涼

「最近増えましたからね」

山口

「うむ。おそるべし、動画職人だちだよ」

やよい

「うっうー！今日も何か紹介するんですか？」

山口

「そうだな・・・やよいちゃんも登場する作品を紹介しよう！！という訳で、以下の3作を紹介します。普通に日常を書いているはずが、春香たちの暴走によって普通にならないPの日常とか、ひびきと真が涼を取り合うやつとか、何故か765プロのキャラが出てこない留守番しているPの話とか・・・」

http://www.nicovideo.jp/watch/sm9096477
http://www.nicovideo.jp/watch/sm9096477
http://www.nicovideo.jp/watch/sm10399120

真

「これはまたすごい作品ばかりですね」

やよい

「けど、楽しい作品ばかりですよー」

山口

「あと、どの作品でも小鳥さんが腐っているし、千早は胸でネタにされるけどね」

涼

「またそう言うこと言う」

やよい

「後で大変なことになるんじゃない……」

山口

「やよいちゃん、そういう言葉がフラグを……」

空気を裂くサイレンの音……

山口

「何だ？」

真

「山口さん、上上!!」

山口

「あれはスツーカー!! しかも腹に1も爆弾を!!」

真

「逃げましょう!!」

「まったく、我らがちーちゃんも無茶な命令を出してくれる。どうせならアカ相手なら嬉しいんだがな……なあ、ガードルマン」

「ちゃんと命令だから仕事はしてください」

「わかってるさ。腐っても、我々はちーちゃん○ファンクラブだからな。……それ、プレゼントだ」

「元ネタを知りたい方は、ニコニコ動画で千早の第三帝国興亡記と検索しましょう」

「「「ああ!?!?!」」」

ドグワン!!!!!!!!!!

1月27日午前 山口Pより八幡Pへのメッセージ

八幡

「やはり、A列車の醍醐味は豆腐積みかな」

響

「とーふ?」

八幡

「資材のこと。いかに無駄なく美しく積むかが腕の見せどころだね」

響

「ところで、多聞が自分をいぢめるって言うてるんだぞ」

八幡

「72ツ? 千早はGoogle先生も公認だから構わないが、響をいぢめるのはいかに山口先生といえど……」

すちゃ

響

「なんだそのアフガンゲリラが持ってそんな武器は!？」

八幡

「RPG7。ちょっと練習しようと思ってね」

sm7363135 ガンプラP 物理演算でRPG発射
続編は 物理演算でダルマ落とし

八幡

「ていつ」

ボウン

響

「おー、凄い光景だぞ」

八幡

「だろ……」

ちゅどーん

ここで記録は途絶えている。

ちなみに、Googleで『72』と検索すると、関連に『胸囲』
があつて……。

1月27日夕方 八幡Pより山口Pへのメッセージ

山口

「なんとかルーデルから逃れられたよ」

真

「危うく僕たちまで巻き込まれる所でした」

やよい

「うっうー！何とか生きてます。」

山口

「3人の生存を確認した所で、題名どおり響をネタにしようかと。」

涼

「懲りない人だな・・・ところで、何で僕たち駆逐艦の上に乗っているんですか？」

山口

「ルーデルさんも、こんな所まで追ってこないだろうから。ちなみに、今乗っているのは私が平行して連載している「ゼロ戦才人」シリーズの「ゆきかぜ」だ。さあて、響をネタにしましょう！！」

涼

「あーあ」

やよい

「私たち知りませんから」

山口

「響と言えば、やっぱり詐胸だよね」

「この言葉が、後にトンデモナイ事態を引き起こす」

真

「予想はしていましたが、そのネタですか」

山口

「まあ、王道だから。」

真

「知りませんよ、響がどんな復讐に出るものやら・・・」

山口

「けど、さすがにこんな海の上じゃ・・・」

と、その時艦上にサイレンが

山口

「何だ？」

やよい

「うー、何ですか？」

山口

「大内艦長、何事ですか？」

大内

「レーダーが本艦に高速で接近する艦影を捉えた！そのため、戦闘配置に！」

山口

「艦影・・・まさか？」

通信兵

「艦長、山口さんを名指ししての入電です」

山口

「私に？」

電文を受け取り眺める。真とやよいも覗き込んでみる。

『顔ヲ洗ッテ待ッテイロ、ジュゼツペ・ガリバルディ艦長、我那覇響・・・ツイシン。山口多聞ハユルサズ』

「「「・・・」」」

大内

「どうやら一戦交えなければならんようだな」

山口

「ですね。」

真・涼

「「ですねじゃないでしょ！！」」

山口

「うん。適格な突っ込みありがとう。ところで、前回のメールでRPG7についてのMMD映像の紹介があったけど、以前参加したIFCONで小林源文先生が、モンゴルだったかどこかで発射体験したとか言っていた。」

真

「今、そんな話している余裕あるんですか!?!...それから、MD映像で山口さんのお気に入りはこちらです。」

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm13070604>

やよい

「真ちゃんが山口さんに毒されています。」

1月27日夜 山口Pより八幡Pへのメッセージ

その頃 『ゆきかぜ』電探幅域外

艦隊旗艦 原子力空母『信濃』

八幡

「ま、喧嘩両成敗ってやつよね。さすがに詐胸呼ばわりされちゃ黙ってられないし」

オペレーター

「カタパルト圧力適正。各機、発進せよ!」

あずさ

「あずさ、行きまゝす」

美希

「ミキ、発進なの♪」

腹に対艦ミサイル『遺憾の意』6発を抱えたあずキャットと護衛のあふうランカーがカタパルトから弾き出された。

八幡

「アズサ00、繰り返すが、貴女の任務は、艦種不明『ジュセツペ・ガリバルディ』及び駆逐艦『ゆきかぜ』の撃沈だ。アフウ00は護衛に徹しろ。幸運を」

絵理

「……こちら、空中管制機エリ100?」

八幡

「聞かれても困るんだが」

絵理

「まもなく貴機は電探に探知される? ……注意せよ?」

美希

「だから聞かれても困るの」

あずさ

「あらあら」

八幡

「通信士、『ゆきかぜ』及び『ジュセツペ』に打電。『少々おイタが過ぎたようだな、お前ら首洗って待ってろ』と」

「ついに海戦の幕が上がる」

1月28日夕方 八幡Pより山口Pへのメッセージ

詐胸海戦勃発!?(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

そして八幡先生の本編と新連載のサブマリン876もよろしく。

——第10話記念 感想返信コーナー——（前書き）

今話の内容は全て八幡先生からの提供となっています。

八幡先生（八幡P）ありがとうございます。

——第10話記念 感想返信コーナー——

——第10話記念 感想返信コーナー——

八幡

「どうも、通称“表”の作者、八幡です」

春香

「主席参謀の天海春香です。本編で出番が無いのでアシスタントやりまーす。ところで、なんですか、このコーナー？」

八幡

「いやあ、“裏”の感想欄、久しぶりに見たら、結構感想とか質問来てるんですね。これはどうにか反応しないと、と思った次第なんだよ」

春香

「山口さんに無理言ってこっちにまで出張してきたのはそのためなんです。じゃあ早速、4月25日までの分を返信しましょー」

◇水底に眠れさん

春香

「水底さんは八幡さんがいろいろお世話になっている方ですよ？」

八幡

「ああ大変お世話になっている方だよ。こっちに関係あることで言えば、もし、水底さんと知り合ってたなか

ったら、活動報告に『アイマス架空戦記書きたい』なんて書かなか
っただろうね。ネタがわかる人もいないのに活動報告にそんなこと
呟くことは無い訳だし」

春香

「そうなんですかし。で、きっかけは……千早ちゃん？ 人との出
会って何があるかわかりませんね」

八幡

「まさに72が繋いだ縁だよ。で、誰かがいつか見て、反応してく
ればと、活動報告書いたら……」

春香

「6時間後に“新着メッセージが1件あります”と？」

八幡

「まあ見た方が早い」

12月9日深夜の八幡活動報告

余談ですが、先日、ニコニコ動画で嘘m@sという企画があったの
ですが、なんか見てるうちにやりたくなってきたんですね。

とはいえ、動画は作れ無いので小説で、ですが。

で、一つ問題がありまして、納得のいく状況と組織がいまいち思い
付かないんです。

(中略)

登場人物や所属(日本軍)は決まっています……。アイマス

ま、ここでも言っても仕方ないことですが、とりあえず言うだけ言ってみました。

〜これにまさか反応があるとは……〜

6時間後、山口多聞Pより八幡Pへのメッセージ

活動報告読みました。私もニコニコ動画のアイマス架空戦記の大ファンです。特にサイレントハ○ター系の「シュ○ー奮闘記」と提○の決断系の「八○艦隊偶像物語」がお気に入りです。

同好の士がこんな近くにいたとは、嬉しい限りです。

それで自分も嘘m@sに挑戦したかったのですが、動画は作れませんのでせめて小説と考えましたが、結局現在連載が数本ありますから、プロットのみで断念しました。

そちらは自分の没ネタ集に掲載したので、よろしければどうぞ。

〜systemさんかと思ったらまさかの……〜

14時間後、八幡Pより山口多聞Pへのメッセージ

メッセージ読みました。こちらこそ趣味が合う人がいて嬉しいです。私は『アイド○達と昭和日本』や『千早の第三帝○興亡記』なんかのH○I2系が好きですね。

ネタ集拝見致しました。

独立アイドル艦隊ですか、ありがたく使わせて頂きます。

……小説化は何時になるかわかりませんが。

ネタ提供ありがとうございました。

「これが冒頭の“全ての始まり”分です」

春香

「ここから冒頭に繋がるんですね。……なんか、感想返しからおも
いっきり脱線しましたけど」

八幡

「特に水底さんの感想自体には言うこと無いんで。感想ありがとうございます
ございました」

春香

「ございましたー」

◇kirisimaさん

春香

「kirisimaさんからは3件も感想頂いてますね。英国の面
妖な空母って何ですか？」

八幡

「実はそれ、英国空母に対してじゃなくて、別の艦に対してなんだ
よ。検閲のせいで分かりにくいけど。だからそれであってます」

春香

「そして千早ちゃんネタは……」

八幡

「まあ、当然いぢられますわな。海軍ぐるみで」

??

「犯人は朕」

春香

「……なんか言いました？」

八幡

「いや……なにも」

春香

「そうですか？　じゃあ……わーい／＼（＾－＾）／なかーま！」

八幡

「／＼（＾－＾）／なかーま！　私も似たようなもんですね」

春香

「戦記鉄道二次元を好み、アイマス好きだけど持ってない、と」

八幡

「ゼロ魔は知らんがね。動画の趣味も近いらしいし、共通項は多いよ」

小鳥

「事あるごとに私が千早ちゃんに撃たれるのも共通項ピヨ……」

八幡

「なんか言ったか？」

春香

「幻聴ですよ、幻聴」

小鳥

「ピヨォ〜（泣）」

春香

「感謝ありがとうございます！」

◇ジョン・ドーさん

春香

「えっと……………σ（のワの）」

八幡

「面識ないとやりにくいなあ…………」

春香

「お名前はよくお見かけするんですけどねー」

八幡

「ともあれ、とりあえずお返事をば。…………ノリノリで設定組んでるのがよくわかるですか。はい、完全にノリと勢いだけで書いてます」

春香

「ホント、それだけですよねー」

八幡

「あと、ひとつ言っておきたいんだけど、アイドル艦隊の原作に“独愚”は入ってないからね？」

春香

「えっ！？ そんな。せっかく“アレ”みたいに戦死しないで済むと思ったのにー」

八幡

「おいおい……。まあ、あの“誰も死なない架空戦記”ですら、愚連艦隊の潜水艦は沈んでるし、確か南雲提督もさりげなく……」

春香

「うわあ……。でも、そうならない為に私たち参謀がいるんです！」

八幡

「その意気だよ。……また脱線したな……。春香、メよろしく」

春香

「はい！ 感想ありがとうございました」

八幡

「さて、今のところこれで全部だね」

春香

「本編も宜しくお願いします♪」

八幡・春香

「「それでは」」

——第10話記念 感想返信コゝナ——（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

そして本編共々、今後ともよろしく願います。

詐胸海戦 航空戦編（前書き）

当作品を読んでも、私はともかく決して八幡Pをイタイ目で見ないでください。

詐胸海戦 航空戦編

涼

「わー、どうでしょう!？」

やよい

「わ、私たちどうなるんでしょう？」

山口

「普通に考えれば瞬殺だね。だってこの「ゆきかぜ」は日本海軍の「雪風」を1950年代のアメリカ軍装備に換装しただけだもん。

「ジュゼッペ・ガリバルディ」も軽巡だからな・・・現代の爆弾喰らったら一溜まりもない。それにしても、八幡さんも中々上手く切り返すじゃないか」

涼

「落ち着いている場合ですか!？このままじゃ沈められちゃいますよ」

山口

「大丈夫だよ。強力な助っ人を読んだから」

真

「強力な助っ人て誰ですか？」

山口

「前も言ったけど、この艦はゼロ戦才人シリーズに登場している艦だよ。つまり、ゼロ魔の設定が使えるんだよ」

真

「あ、なんとなくわかりました」

やよい

「どういうこと、真ちゃん？」

山口

「こう言うことだよ。御紹介しましょう、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢」

ルイズ

「まったくもう、最近本編に出さないと思ったら、こんな所に呼び出して！このバカ作者！」

やよい

「うわ！声も正確も伊織ちゃんとそっくりですー」

山口

「まあ、中身は同じだから。」

真

「山口さん、めたらないでください」

山口

「ごめんごめん、真。で、ルイズさんをお願いなんですか、魔法を1発お願いします」

ルイズ

「何であんたのために魔法を打たなきゃいけないのよ！？」

山口

「まあ、私はともかくとして、このままではそこにいる真ちゃんとやよいちゃんも死んじゃうんで」

やよいを見るルイズ

ルイズ

「ま、まあ。女の子が命の危機にあるんじゃないや仕方が無いわね。その代わり、ちゃんと本編で出番作りなさいよ」

山口

「わかっています」

「なお、この約束は6月16日時点で全く守られていない」

絵理

「アズサ00、もうすぐ目標が見える？」

あずさ

「了解よ、絵理ちゃん。山口さんや真ちゃん達にきつく、お仕置きするわね。」

美希

「あふう。とっとと終わらせて帰るの・・・」

爆弾投下コースに入ったあずさ。と、その時。

ピカ！！

絵理

「きゃ!？」

美希

「わあ!！」

あずさ

「な、何!？・・・え、エンジンが止まったわ。操縦できない。脱出するわね」

バシユ!！（あずさ誰もみ状態のあずキャットより脱出）

絵理

「電子系統が全部ダメ・・・レーダーが真っ白？無線もだめ？」

美希

「な、何が起きたの？」

美希の背後に迫るM i g I 9の影

山口

「才人君、今だ!死なない程度に攻撃しろ!！」

才人

「了解!！」

バババ

美希

「きゃ！や、やられたの！飛行不能、脱出するね！！」

バシユ（美希操縦不能のあふうランカーより脱出）

絵理

「ふ、2人がやられた？一体何が？」（絵理、戦闘続行不可能により帰還）

「ゆきかぜ」ならびに「ジュゼッペ・ガリバルディ」未だ健在。

山口

「いやあ、さすが虚無魔法。直接的に撃墜するのは無理だったけど、ちゃんと致命傷は与えたようだね。そして才人君の乗るMig19も、相手がレーダーも使えない状況での奇襲なら充分役に立ったね」

ルイズ

「ゼーゼー。けど、打つ方はすごく疲れるんだから・・・感謝しなさいね」

バタ！

ルイズ気絶。ただちに担架で医務室へ。

涼

「まさかチートに頼るとは思いませんでした。助かりましたけど」

やよい

「けど、脱出したあずささんと美希ちゃんは大丈夫なんですか？」

山口

「大丈夫だよ、やよいちゃん。今頃響の軽巡「ジュゼッペ・ガリバルディ」が救助へ向かった筈だから。けど、このまま行くと他のキヤラが攻撃して来そうだな・・・」

真

「どうするんですか？ルイズさんはもうダメでしょ!？」

やよい

「うー、今度こそ本当に殺されちゃいますよー」

山口

「まだまだ。艦隊と合流すればなんとか・・・」

真

「艦隊？どの艦隊とですか？」

山口

「それは八幡さんの返信しだいだよ。まあ、場合によっては戦場が変わるかもね。ああ、あと敵キヤラとして涼を使われないよう、今の内に拉致っておきましょう」

涼

「ギャオオオオン!!何で僕まで!?!」

山口

「道連れ」

涼

「薄情だあ!!」

「1月28日夜山口Pより八幡Pへのメッセージ」

電波ジャック開始

八幡

「かかったな、そいつらは囷だ。才人君、見張りがお留守だよ」

才人

「なっ!」

雪歩

「電波の穴からこんにちは、萩原雪歩ですう。男の人と犬は大嫌いです。落ちてください♪」

ズドド

M i g I 9 墜落 才人ベイルアウト

雪歩

「あ、こっちも操縦不能ですう」

ゆきホーク墜落 雪歩ベイルアウト

八幡

「あ……。ごほん。まあ、無意味にたった2機で攻撃しないね。」

ゆきかぜ』がSAM装備してないかと思ったんだが。まあ、美希を覚醒させてくれたことには感謝しようか。それではご機嫌よう」

ぶっん

絵理

「ただいま？　なんか帰って来たら艦と機体が変わってた？」

八幡

「うん、ちょっと空気読んで、空母は大和型3番艦に、搭載機体も飛燕改／流星改／彩雲改にした。あと、魔法使いに対抗してマ砲使いを……」

絵理

「まさか、『管理局の白い悪魔』！？」

八幡

「いや、『覚醒美希』を飛燕改にのせただけ」

絵理

「……（マウザー砲使い？）・・・『ゆきかぜ』と艦隊が合流しようとしている？」

八幡

「対抗してこちらも、『ジュセツペ』含む全艦隊で合同する。貴音艦隊の『クレマンソー』にも伝えろ」

美希

「ただいまなの～」

八幡

「お、お帰り美希。まもなく全空母の攻撃隊が準備できるからな」

美希

「次こそは血祭りにあげてやるの♪」

通信士

「『クレマンソー』より入電。『合同完了、このまま遊弋す。心遣い感謝』」

八幡

「お、丁度さっき出した直援機もついたみたいだな。これで、飛行機にはやられないぞ」

絵理

「これで勝てる？」

八幡

「だが本隊との合流・攻撃隊発艦は間に合うか……」

通信士

「『雲龍』偵察機より入電、『敵艦隊発見、これより触接す』」

八幡

「げ、このままだと貴音艦隊は伊藤長官程度の戦力（プラス『ストラスブール』）で敵とぶつかる……」

「1月29日朝八幡Pより山口Pへのメッセージ」

山口

「なんとか艦隊と合同できたな」

真

「結構大きな艦隊ですね」

やよい

「うっうー、これなら勝てますね」

山口

「勝てるかはやってみないとね。とりあえず、我々は旗艦の巡洋艦「おおよど」に移ったわけだね。ちなみに、この艦隊は私の書いているゼロ戦才人シリーズに出てくる『東方義勇軍』水上部隊の主力艦隊で、編成は以下の通り」

司令官小林中将

第一打撃戦隊・・・巡洋艦「おおよど」

第一航空戦隊・・・空母「ブリシंगाメーン」強襲揚陸艦「にぎつ丸」

第一水雷戦隊・・・駆逐艦「ゆきかぜ」「ノール」

第二水雷戦隊・・・駆逐艦「かえで」「さかき」

第一護衛駆逐戦隊・・・駆逐艦「新月」「双月」「秋月」「照月」

涼

「戦艦もないし、空母も軽空母が2隻だけじゃないですか！？これじゃああつと言う間にやられちゃいますよ！！」

山口

「さすが秋月一族の最高傑作。その通り、この戦力では勝てない！・

・・というわけで、同じくゼロ戦才人シリーズに出てくるある艦艇群を編入した」

真

「何です？」

山口

「実はこのシリーズ中で、異世界のビキニ原爆環礁の標的軍艦が無傷で転移してくると言う話があって・・・」

真

「さては、その船を使うつもりですね」

山口

「大正解だよ真。今回編入するのは戦艦「比叡」「霧島」、巡洋戦艦「グナイゼナウ」、正規空母「麗鳳」と軽空母「紅燕」、巡洋艦4隻に駆逐艦8隻だね。いずれもバラバラな型だけど、空母の艦載機145機が加わるから、まあ、なんとかなるだろう。」

真

「おお！これだけあれば負ける気がしない！！」

やよい

「うっうー、燃やし祭です！」

山口

「艦隊総指揮官はこのまま本編の小林中将に執ってもらうけど、せっかくだから戦艦部隊は真と、捕虜にした雪歩に任せよう」

真

「了解です！バリバリ行きますよ！」

やよい

「それから水雷戦隊はやよいちゃん、空母戦隊は涼に任せよう。」

涼やよ

「「わかりました！！」」

山口

「では諸君！戦争を始めようか！」

一同

「「「おおー！！」」」

山口

「第一波攻撃隊発進せよ！！」

攻撃隊発進中。総合計150機。敵偵察機を追尾して攻撃をかける予定。

ちなみに、主力をなす機種は以下の通り

日本社会主義人民共和国海軍3式艦上戦闘機「疾風改」

全長9，85 m 全幅11，4 m 自重2720 kg

速力620 km 航続力1700 km

武装12，7 mm機銃2基

20 mm機銃2基

発動機「ハ14521」 空冷2000馬力

帝国海軍四三式艦上戦闘機

全長10,5 m 全幅13,2 m 自重3520 kg
速力630 km 航続力1800 km
武装12,7 mm機銃6門
爆装500ポンド

発動機P&W R2800…8ダブルワスプ空冷2000馬力

四三式艦上爆撃機

全長10,2 m 全幅15,5 m 自重4380 kg
速力592 km 航続力1800 km
武装12,7 mm機関銃3基
爆装1000ポンド

発動機P&W P-2800…8 ダブルワスプ空冷2000馬力

四三式艦上攻撃機

全長12,2 m 全幅16,6 m 自重4600 kg
速力450 km 航続力1800 km
武装12,7 mm機銃3基
爆装1 t又は魚雷1本

OS2型 43式2型艦上戦闘機「バッファロー」

全長8,2 m 全幅11 m 自重2100 kg
速度550 km 航続力1700 km
武装12,7 mm機銃4基
爆装主翼下にロケット弾4発又は60 kg爆弾×4。胴体下に250 kg爆弾1発。

発動機ライトR1820-40改 空冷1600馬力

OS3型戦闘機（44式1型戦闘機） 「超零戦」1型

全長11m 全幅12,8m 自重3800kg
速力720km 航続力3600km(最大)
武装20mm機銃2基
12,7mm機銃4基
爆装1,5t又はロケット弾8発(爆装はあくまで最大値)
発動機「ユモ213改」液令2500馬力

艦艇性能諸元(一部)

巡洋艦「おおよど」

全長189m 排水量8500t 速力33ノット
武装15,2cm3連装砲3基9門
5インチ連装両用砲4基8門
40mm連装機関砲6基12門
20mm単装機関砲10基
ヘッジホッグ2基
水上機2機

駆逐艦「ゆきかぜ」

全長119m 排水量2100t 速力33ノット
武装5インチ連装砲3基6門
40mm連装機銃4基8門
20mm単装機銃8基
61cm4連装魚雷発射管1基4門
ヘッジホッグ2基
爆雷60個

駆逐艦「さかき」

全長100m 排水量1300t 速力28ノット
武装5インチ連装砲1基2門

5インチ単装砲1基1門
40mm連装機銃3基6門
20mm単装機銃6基6門
ヘッジホッグ2基
爆雷50個
同型艦「かえで」

航空母艦「ブリシנגアメー」
全長190m 排水量15000t 速力23ノット
武装5インチ単装砲6門
40mm連装機関砲4基
20mm単装機関砲16基
カタパルト1基
搭載機21機

山口

「それから敵艦隊に向け平文で発信！謹んでお相手致すだ！！」

「ついに火蓋を切る！」

1月29日朝 山口Pより八幡Pへのメッセージ

八幡

「ご丁寧に艦隊編成まで教えてくれるとは舐められたもんだ。なあ
律子」

律子

「んー、でも戦艦劣勢、航空機数は優越で質は劣勢、水雷戦隊は3

割程劣勢。さらにこちらは合流が完了していないとなると……」

八幡艦隊編成

本隊

正規空母 『信濃』 雲龍級 『雲龍』 『天城』 『葛城』

航空機 200機

重巡 改高雄級 『摩耶』

軽巡 改5500級 『五十鈴』

駆逐艦 秋月級 『冬月』 『涼月』 101号級 『101』 『102』

『103』 『104』

貴音艦隊

戦艦 『クレマンソー』

巡洋戦艦 『ストラスブール』

軽巡 『ジュセッペ（ry）』 『阿武隈』

駆逐艦 『島風』 特3型 『響』 『雷』 『電』 『暁』

八幡

「きついな。でも……」

律子

「かなり強くないですか？」

八幡

「なんか向こう『超零戦』とか言う、ウチの『飛燕改』より80キロは早いのがいてな……、向こうの作品内で『流星』やフォッケに軽々と追い付いてた。それが推定20機くらい……」

律子

「うわ」

八幡

「んで、向こうには君ん家の最高傑作他、人材が戦闘向きだし。ただ……」

律子

「ただ？」

律子

「あちらも、まさか『彩雲改』に、チームE111e謹製のパノラマ式対空レーダーが標準装備とは思わなかったらしいな」

絵理

「美希さん、その雲の下に敵編隊、数は150？」

美希

「みんなっ、戦闘機狙いで一撃離脱なの！ さっと引き上げて攻撃隊の護衛に戻るの！」

グワーン

ズドドドドド

美希

「墜ちるの！」

『飛燕改』27機、『ふる飛燕』1機

戦果

撃墜 戦闘機20機程度

その他離脱させたもの 雷爆撃機10機程度

損害

戦闘に支障あるもの無し

美希

「もうすぐ敵艦隊、沈める必要は無いの。艦爆隊は空母の甲板を、艦攻隊は戦艦の機関を中破させれば、後は貴音たちが殺してくれるの♪」

真美

「艦爆隊りよ↓か↓い☆」

亜美

「艦攻隊りよ↓か↓い☆」

一方山口艦隊第一次攻撃隊は、『彩雲改』の的確な誘導を受けた『飛燕改』計54機の奮戦により大幅に数を減らしながらも攻撃位置についた。

艦長

「対空戦闘用意！」

ドン！ ドオン！

ズドドドドド

ダダダダダダ

各種対空兵器が火を吹き、空を黒く染める。

「今だ！ 奮進砲発射！」

ズバアアア

見張り

「直上、急降下！」

ズドーン ズドーン

「うわあっ」

「キャー」

攻撃隊が去った後には、炎上する二隻の空母が残された。

損害

沈没

『104』摩耶の身代わりに被雷、沈没。

大破

『天城』被雷4・爆弾3命中。傾斜・炎上中。総員退艦

『葛城』爆弾3命中。発着艦不能、炎上中。速力半減。

中破

『信濃』被雷2・爆弾多数命中。航行に支障なし エレベーター修理中。

『雲龍』爆弾1命中。発艦不能。甲板修理中。

小破

『五十鈴』至近弾小破。戦闘に支障なし。

航空機合計40機を失う

戦果

敵機相当数を撃墜

次回、八幡艦隊第一次攻撃隊の『飛燕改』37機、『流星改』108機を待ち受けるのは!?

登場兵器

基本的に史実艦・史実機がともに完成したもの

101号級駆逐艦

アメリカの平甲板型から魚雷と主砲を下ろし高角砲と機銃をのせたもの。

飛燕改

21型を艦上機化、速度を624キロに抑えて航続距離を2400キロに伸ばした

ふる飛燕（飛燕改）

美希専用機で魔改造済み。もちろん痛い塗装。

美希しか扱えないが、レシプロ機では最強クラス。エースでも格闘戦に持ち込まれたら終わり。

「1月29日夜八幡Pより山口Pへのメッセージ」

乗田

「航空隊は意外と苦戦しているようだな・・・だが、敵さんは海中にまで注意が回らないようだ。僚艦に伝え、敵艦隊殲滅攻撃に掛かれ！！」

乗員

「了解です、乗田少将。」

東方義勇軍潜水艦隊所属、乗田少将。

乗田

「それでは桜井君、後は任せる。」

桜井夢子

「任せてください。私の手に掛ければ、空母の1隻くらい簡単に沈めて見せます。・・・よし、あの艦橋に煙突がある空母を・・・1番、2番ミソサザイ、3番、4番通常魚雷。撃て！！」

呂501より4本、「シェルクーフ」より4本、SS709より6本、その他2隻より12本、計26本発射。この内半分はホーミ

ング。

兵

「命中まで5分。」

夢子

「潜望鏡を下ろして頂戴。」

乗田

「全艦深深度まで潜航の後、各自遁走せよ。」

一方主力部隊は

山口

「航空隊の被害が大きいのか？」

山口（「おおよど」座乗）、涼（空母「麗鳳」座乗）と無線電話中。

涼

「敵に待ち伏せされたみたいですし。それに、戦闘機の性能もパイロットの腕も悪くなかったようです」

山口

「君が悪びれる必要はないぞ涼。それよりも、空母戦隊の指揮をしっかりとやれよ。出来うるなら、収容後に第二次攻撃隊を発進させるように」

涼

「了解です。」

山口は一旦電話を置いて、真（戦艦「比叡」座乗）へと連絡をとる。

山口

「真、敵機がもうすぐ来る。空母部隊はしばらく忙しい。予定通り、敵の攻撃は、前に出た君の戦艦部隊で引き受けてもらうぞ」

真

「お任せ下さい山口さん。この2隻なら大丈夫ですよ」

山口

「その「比叡」と「霧島」は、元ネタの「蒼茫の海」でアメリカ式の対空戦艦に改装された艦だ。それに加えて主砲には新3式弾・・・程ではないが、高い焼夷能力を誇る48式対空焼夷弾が装填されている。護衛している「小笠原」と「硫黄島」も元は「クリーブランド」級だ。3秒に1発の速射能力を見せてやれ。他の2隻の巡洋艦も対空強化済みの「ミネアポリス」と「アドミラル・ヒップパー」だ。がんばれ！」

真

「はい！！がんばります！！！」

小林

「山口君、レーダーが大編隊を捉えた。味方の機影とは違う」

山口

「了解です、小林中将。ここが正念場です。さあ、来るなら来てみ

ろ！」

美希

「もうすぐ敵艦隊なの！皆警戒するの！！！」

兵士

「隊長、前方より敵戦闘機20機！！！」

美希

「たった20機じゃお話にならないの、一気に蹴散らすの！！！」

兵士

「マルセイユ中佐、敵の護衛戦闘機です！！！」

ハンス・マルセイユ義勇軍大佐

「了解。各機、ロケット弾を2発ずつの発射モードに。半分だけ撃つぞ・・・撃て！！！」

20機の戦闘機より、80発のロケット弾が美希たちに向かう。

美希

「そんなロケット弾当る筈がないの。往生際悪いの。」

ドドド・・・（美希たちの至近で一斉に爆発）

美希

「嘘！！？！？どうして！？」

美希の機体はなんとか無事だったが、護衛戦闘機の3分の2が撃墜されるか戦闘不能に陥る。

マルセイユ

「義勇軍謹製のVT信管付き空対空ロケット弾のお味はどうか？全機、後方の攻撃機にアタックだ！！」

パイロットたち

「「了解！！」」

美希

「や、やらせはしないの！！」

美希はマルセイユに一直線！！

マルセイユ

「ほう、やる気だな。こちらマルセイユ、攻撃機への攻撃は中止！俺とダンスのお相手をしろ。どれ、久しぶりのドッグファイトだ！！」

亜美

「真美、真美！大変だよ！戦闘機隊が！」

真美

「落ち着くんだよ亜美。敵戦闘機は美希たちがしっかりと足止めし

ているよ。真美たちは、予定通り突撃だ!!」

亜美

「う、うん!」

雪歩

「目標射程に入りました。全主砲撃ち方準備よし。「霧島」と「グナイゼナウ」も準備完了ですう」

真

「ようし、撃ち方始め!!」

25発の48式対空焼夷弾発射。

亜美

「さ、散開!!」

真美

「逃げろ!!」

ドグワーン!!

真

「7・・・8・・・9・・・10。10機ちよっとってどこか。散布角を大きめにしたけど、上手く行かないな。」

兵士

「敵攻撃機、攻撃態勢に入りました。」

真

「主砲発射中止！高角砲、機関砲撃ち方はじめ！！」

兵士

「軽巡部隊、撃ち方はじめました！！」

アメリカの誇る、VT信管が攻撃隊に刃を向く。

真美

「亜美、亜美。空母がないよ」

亜美

「もしかしたら、もっと後ろかもね↓」

真美

「そうだね↓。探そう探そう」

数分後、八幡攻撃隊の一部が空母を発見。

兵士

「敵30機あまり、来ます！」

涼

「対空戦闘開始！やよいさん、頼みますよ。」

やよい

「うっうー。空母には指一本加えさせません。燃やし祭です！！」

空母部隊に襲い掛かった30機に、各艦搭載の5インチ砲、40mm機関砲、20mm機関砲が向けられる。

涼

「面舵一杯！！」

涼座乗の「麗鳳」、爆弾回避に成功。しかし。

兵士

「「紅燕」被弾！！」

涼

「ぎゃおおおん！やられた！！」

真美

「やったぜ亜美。」

亜美

「けど、沈みそうにないよ真美。」

真美

「けど、もう爆弾も魚雷もないよ。」

亜美

「ちかたない、帰ろう。」

真美

「うん、帰ろう。」

山口

「全員生きているか？」

涼

「はい」

真

「生きています」

雪歩

「なんとか」

やよい

「うっうー、大丈夫です」

小林

「山口君、被害の集計結果だ。」

山口

「ありがとうございます。小林中将……こりやまた手酷くやられたな」

沈没……軽巡「小笠原」

大破・・・軽空母「紅燕」、
「ブリシंगाメーン」 巡洋戦艦「グ
ナイゼナウ」

中破・・・戦艦「霧島」、重巡「ミネアポリス」
戦闘機未帰還7機

山口

「空母は守り切りましたけど、戦艦2隻がアウトですか」

真

「ごめんなさい。山口さん」

山口

「いいや、元々覚悟の上だ。沈没艦を1隻に抑えただけでも僥倖だ
よ」

さらに、涼から電話

涼

「こちらも被害集計出ました。航空隊も大打撃です。帰還しても損
傷している機体が多いです。第一波の半分を出すのが精一杯です
よ」

山口

「こりゃ、潜水艦部隊の戦果待ちだな。それから・・・彼女に期待
するしかあるまい」

八幡艦隊の航空攻撃を切り抜けたものの、戦艦と艦載機に大ダメ
ージを追ってしまった山口部隊。一方、乗田少将と夢子の潜水艦部
隊の戦果如何に？

「1月29日深夜　山口Pより八幡Pへのメッセージ」

八幡

「ふう。なんとか切り抜けたな。艦長、速力このまま、艦首を風上に立てて直掩機の収容にあたれ。『葛城』は無理させるな。18ノットは出るんだ」

艦長

「了解、面舵……………戻せ」

律子

「気を緩めてて良いんですか？　潜水艦に襲われたら……………誘導魚雷、ミソサザイとか撃たれたら……………」

八幡

「ああ、そのミソサザイってね、案外欠点が多くて、12ノット出していないと誘導出来ないのは有名だけど、魚雷の最大速度が24.5ノットだから、例えば今撃たれても追い付けない」

律子

「確かに今28ノット近いですからね」

見張り

「左舷より雷跡2！」

艦長

「面か……………」

八幡

「待て！ 避けなくて良い！」

律子

「そんな!？」

八幡

「まあ見てな」

雷跡が舷側に吸い込まれてゆき……………

ごいん ごいん

律子

「……何故？」

八幡

「まず、今日は波が穏やかだ。それに、軍艦狙い。よって磁気信管で艦底起爆だと思われる」

律子

「なるほど」

八幡

「で、艦底起爆なら、喫水の1〜2メートル下を狙う。だが、果たして『信濃』の喫水10メートルちょいを正確に知り得るだろうか？ いや、おそらく『翔鶴』や『隼鷹』の9メートル弱と間違える」

律子

「ふむ」

八幡

「で、『信濃』のその深さは丁度艦底の丸いところだし、角度も悪い。ほぼ不発だ」

律子

「詳しいんですね」

八幡

「伊達に『サイレントハンター』やりこんでないよ（笑）」

その時

ズーン　ズドーン　ズーン　ズーン　ズドーン　ズドーン

ズドーン　ズーン

八幡

「なんだ!?!」

律子

「『葛城』被雷!　轟沈します!　さらに『天城』も沈没します!」

八幡

「……『101』を救助に向かわせろ」

損害

沈没

空母『葛城』『天城』

中破

軽巡『五十鈴』

ソナー員

「爆発音多数！……さらに大爆発！」

夢子

「よっしゃあ！これは間違いなく何隻か喰ったわね！」

八幡

「さて、航空隊は4割にまで減ったか……」

美希

「面目ないの」

八幡

「ま、空母も半減したし、期待以上の戦果だから問題ない。補用機も組み立てて『飛燕改』が60機あるから空襲に備えて」

美希

「了解なの♪」

律子

「第二次攻撃隊は出さないんですか？」

八幡

「うん。敵の対空砲火がかなり苛烈だから……」

貴音

「つまり私^{わたくし}の出番ですね！」

八幡

「うん。貴音の艦隊は未だ無傷、水上砲雷戦で決着を、ね。場合に
よっては『摩耶』もそちに編入する」

貴音

「わかりました。艦隊最大戦速！」

八幡

「よし、『飛燕改』は敵の第二次攻撃隊に備えて、『流星改』は全
機雷装で待機。『彩雲改』は敵艦隊の動向を逐一報告せよ！」

「いよいよ両艦隊は、直接雌雄を決する！直接対決の果ては何が待
ち受けるのか!?!」

「1月30日未明 八幡Pより山口Pへのメッセージ」

詐胸海戦 航空戦編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

詐胸海戦 夜戦編（前書き）

本編に合わせて更新。重ね重ねですが、八幡先生をイタイ目で見ないでください。

詐胸海戦 夜戦編

山口

「損傷艦と空母を分離したわけだが。」

真

「ずっと敵の偵察機につけられていますね。」

涼

「こっちから戦闘機出して迎撃しますか？」

山口

「いや、ここで戦力を消耗するのはマズイ」

やよい

「けど、これじゃあ敵に動きが筒抜けです」

山口

「・・・現状維持のまま。速力20ノットで北方への退避を続ける」

真

「このままだと夜戦確定ですよ？」

山口

「だね・・・各艦対艦戦闘配置そのまま。相手はあの宇宙人・・・じゃなかった。貴音と響のコンビだ。心して掛かれ!!!」

真

「「「おお!!」」」

数時間後

響

「ふふふ・・・山口、今日こそ年貢の納め時だぞ！」

貴音

「響、もう少し落ち着いたらどうです？」

響

「これが落ち着いてられるか！あいつにどれだけバカにされたか・・・」

貴音

「まあ、私も少しばかり因縁がありますから、わからないでもないですが。それよりも、そろそろ接触しますよ」

水兵

「レーダーに敵艦隊捕捉！！」

貴音

「来ましたね！戦闘配置！！」

響

「水雷戦隊は突撃準備！！」

同時刻

水兵

「敵艦隊。偵察機より報告のあった貴音部隊と思います。レーダーの反射数が一致しています」

山口

「よろしい。各艦観測機発進！砲雷撃戦準備！！真、作戦通り頼む。」

真

「わかってますって！フェロモンバリバリで行きますよ！皆頼むぞ！！」

「「「おおー！！」」（比叡乗員の声）」

山口

「やよい、水雷戦隊を頼むよ。相手は響だ。くれぐれも7気をつけて」

やよい

「うっうー、がんばります！」

山口

「涼、そっちも予定通り頼む。」

涼

「はい」

山口

「現在位置だと・・・ギリギリか。」

数分後

水兵

「敵艦有効射程に入りました！」

水兵

「水雷戦隊突撃します!!」

貴音

「よろしい。撃ち方初め！目標敵戦艦!!」

ドドーン!!（「ストラスブル」発砲。）

見張り

「敵艦撃ち方はじめました。」

真

「こっちも撃ち方初め!!・・・けど、上手く行くかな？」

真座乗の戦艦「比叡」撃ち方初め。

同時刻貴音艦隊

見張り

「敵艦発砲。」

貴音

「初弾など当りません。放っておきなさい。」

パン！

貴音

「うん？」

見張り

「敵弾空中で炸裂！あ、あれは！？」

同時刻「比叡」艦橋

見張り

「敵艦甲板に焼夷弾着弾！！」

真

「あれじゃあすぐに消されちゃうよ！！もっと撃ちこんで！！早く、4 斉射分は焼夷弾なんだから、このままだと徹甲弾が撃てないよ！！」

水兵

「わかっていきます！！」

水兵

「艦長！レーダースクリーンが予定通り真っ白に」

真

「涼が出してくれた攻撃隊だ・・・頼んだぞ、涼」

水兵

「攻撃隊、チャフ散布開始!! 予定通りなら、間もなく照明弾の投下開始!!」

山口

「敵の夜間攻撃機に注意しろ・・・超零戦には各機にレーダーが搭載されている。12機しか用意できなかったが、これで何とかなくて欲しいな・・・戦闘機隊は先導機の誘導の下、レーダー有効圏内で待機。それから涼。やよいちゃんを頼むぞ。」

水兵

「水雷戦隊、巡洋艦戦隊、戦闘開始!!」

山口

「・・・」

1月30日朝 山口Pより八幡Pへのメッセージより

八幡

「……月夜の夜戦か……。夜戦に備えて艦隊を再編する」

空母艦隊

空母『信濃』『雲龍』

駆逐艦『冬月』『涼月』『101』『103』

別動隊

重巡『摩耶』

軽巡『五十鈴』（中破）

駆逐艦『102』

八幡

「さて、空母艦隊は退避……」

あずさ

「ただいまです」

八幡

「あ、もし第一次攻撃隊が戦艦を減らせなかった場合に備えて、大攻で滑空魚雷の弾幕張るために待機してたあずささんじゃないですか」

あずさ

「ちょっと、南の島の飛行場が折からの豪雪で使えなくて」

八幡

「そうですね。貴女にも専用機を用意してあるんで、よろしくお願いします」

あずさ

「はい」

八幡

「私も『摩耶』に移る。いざ決戦だ！」

同時刻 艦隊上空

美希

「最後に作戦の確認をするの。亜美真美の『流星改』それぞれ9機は『摩耶』の電波に誘導されて超低空飛行で迂回進撃するの。目標は嚮導巡洋艦、重巡、戦艦の順なの。作戦を成功させる為に、ミキ・あずさの専用『飛燕改』と絵理の専用『彩雲改』で敵を引き付けるの。まもなく敵の電探幅域に入るの。good luck to you!」

3機が上昇してゆく。

美希

「ところで絵理はそんな機体で大丈夫？」

絵理

「サイネリアの有線対空ミサイルがある？」

サイネリア

「任せてくだサイ、センパイ！」

美希

「アルミ欺瞞紙投下なの！」

絵理

「……計算上は『流星改』の全力攻撃に見えるはず？」

サイネリア

「電探に感あり。10機ほどこっちに来ます」

美希

「敵を吊り上げた、繰り返す、敵を吊り上げたの！」

山口艦隊の側面
旗艦『摩耶』

グオオオオン

見張り

「とかち隊が通過！」

八幡

「よし、今だ！ 遠距離統制雷撃戦開始！」

バシユウ バシユウ

八幡

「よし、貴音に打電『五月雨、五月雨』！」

一方、交戦中の貴音艦隊旗艦『クレマンソー』では

貴音

「レーダーを半分封じられて観測機の飛ばし合いですか。難儀な
と」

通信士

「響さんと『響』から通信！ 『突撃許可を！』」

貴音

「ややこしい……。今しばらく待て、と伝えて下さいな」

通信士

「旗艦より打電！ 『五月雨、五月雨』！」

貴音

「今です！ 統制雷撃、駆逐艦は2基分を放て！ その後、水雷戦隊の突撃許可します」

バシユウ バシユウ

見張り

「駆逐艦、雷撃完了！」

貴音

「宜し……」

ドゴオオオン

貴音

「何事です！？」

見張り

「『ストラスブル』被弾！ 炎上！」

貴音

「くっ。菊地真もなかなかやりますね……。敵金剛級に射撃集中！ なぎはらえ！」

ドオオオン

損害

炎上中

巡洋戦艦『ストラスブール』

小破

軽巡『阿武隈』

1月30日昼 八幡Pより山口Pへのメッセージより

水兵

「偵察中の「瑞雲改」より入電、敵艦隊との反対方向に敵の別働隊
！！」

山口

「しまった！？挟み撃ちか・・・」

小林中将

「どうするね、山口君？」

山口

「敵が魚雷を発射するかしないかを警戒して下さい。遠距離雷撃は
命中率が低いですが、酸素魚雷は脅威です。」

小林

「わかった。それから、同じく入電だ。長槍は既に解き放っただ」

山口

「・・・了解です。」

パ！！

見張り

「照明弾確認！！」

同時刻 やよい水雷戦隊

見張り

「敵水雷戦隊、魚雷を発射した模様！！」

やよい

「うっうー！！どうしましょう？」

大内大佐

「落ち着きたまえ高槻君。」「比叡」ならびに各艦に魚雷警報！！それから全艦、減速一杯だ！！」

やよい

「ええ！？」

大内

「敵はこちらの現在の速力を読んで撃ったはずだ。減速すれば、前を通り過ぎるだけだ。」

やよい

「けど、それじゃあ敵の的になっちゃいます！！」

大内

「そう。だから、全力で相手をするまでだ。各砲、敵駆逐艦の射程

に入り次第撃ち方初め!!」

同時刻旗艦「おおよど」

通信兵

「「麗鳳」より攻撃隊発進中。43式艦攻11機と、「赤星」9機です。」

通信兵

「「超零戦」隊は敵戦闘機と空戦中。」

山口

「さすがは八幡さん。こっちの裏を搔いて来るな」

小林

「感心するだけかね？」

山口

「いいえ。敵が裏を?くなら、こちらは裏の裏を?いてやるだけです」

同時刻戦艦「比叡」

砲術員

「これより主砲弾が徹甲弾になります!!」

雪歩

「わかりました。照準そのまま、目標「ストラスブル」！！撃ちます！！！」

雪歩、「比叡」射撃指揮所で射撃中。

雪歩

「ウフフフ・・・「ストラスブル」を砲弾で穴だらけにしてあげます。」

ちなみに、この時点で「ストラスブル」は直撃および至近弾8発で大炎上中。さらに被弾のショックで第二砲塔故障中。

雪歩

「気取って4連装なんか採用するからです。」

しかし。

ズズン！！

雪歩

「な、何ですか！？」

水兵

「魚雷のようです！！」

見張り

「軽巡「硫黄島」2本被雷、速力低下！！」

見張り

「重巡「オイゲン」3本被雷、大破炎上!!!本艦も1本喰らいました。」

見張り

「敵航空機多数接近中!!!」

真

「マズイ!!!」

真ピンチ!?

同時刻やよい水雷戦隊「ゆきかぜ」

大内

「くそ、魚雷はかわせたが。さすがに巡洋艦の火力の方が上か。」

やよい

「このままじゃやられちゃいます!!!」

減速した水雷戦隊に、響の水雷戦隊が急接近!!!

響

「ハハハ、やよい。山口なんかのやろうについたのが運のつきだな!!!」

同時刻旗艦「おおよど」

見張り

「戦艦部隊と巡洋艦部隊に敵機が向かいます!!」

見張り

「水雷戦隊、敵水雷戦隊に苦戦!!」

山口

「・・・」

小林

「山口君」

山口

「・・・間に合わなかったか？」

見張り

「待ってください!! 戦艦部隊に攻撃を掛けようとした敵航空隊に攻撃を掛ける部隊あり。その数30!!」

見張り

「敵水雷戦隊に攻撃中の機影確認、その数20!!」

見張り

「敵別働隊に攻撃を掛ける機影確認、その数25!!」

小林

「山口君、間に合ったようだぞ!」

山口

「ええ。間違いありません。陸上基地から飛び立った支援部隊です。回線を開いてください。」

同時刻上空「スピーキー」

才人

「たく、夜間飛行だなんて無茶させるぜ」

山口

「文句は後でたっぷり聞いてやる。才人君、君の機体では敵艦は沈められん。しかし、ズタズタには出来る」

才人

「わかってますよ」

山口

「目標は敵別働隊旗艦「摩耶」のマストとブリッジだ。存分にやれ！」

才人

「了解です。まさか「スピーキー」で対艦攻撃やるとは思わなかった」

カルロ

「まあ、こいつなら、赤外線センサー付ですから、闇夜でも攻撃可能ですからね。」

才人

「今回出撃した攻撃隊にも、秋葉原とかで調達した暗視ゴーグルや赤外線センサーを取り付けている位だからな。まあ、こんだけ照明弾が落とされてればその必要もないけど」

海戦中、各艦の水上新機ならびに涼の機動部隊の航空機が、立ち代り照明弾を常時投下中。

才人

「んじゃやろうか。」

カルロ

「了解！」

才人

「目標、「摩耶」ブリッジならびにマスト！！撃て！！」

敵別働隊に対して、ガンシップ「スプーキー」3機によるシステム狙いの集中射撃。さらに25機の攻撃機による雷撃。

雷撃隊長

「用意、撃て！！」

響率いる水雷戦隊に、涼の機動艦隊より発進した雷撃機による牽制攻撃。

そして、美希率いる攻撃隊には30機の「超零戦」「バツファロ」 「コルセア」「零戦」の連合による攻撃。

ちなみに、義勇軍側にも指揮・無線統制機がいる。

現在の山口艦隊被害

軽巡「硫黄島」、重巡「プリンツ・オイゲン」・・・大破
戦艦「比叡」・・・魚雷命中により急減速
駆逐戦隊・・・魚雷回避の減速のため、戦闘能力低下中。

OS2型 43式2型艦上戦闘機「バッファロー」

全長8,2m 全幅11m 自重2100kg

速度550km 航続力1700km

武装12,7mm機銃4基

爆装主翼下にロケット弾4発又は60kg爆弾×4。胴体下に250kg爆弾1発。

発動機ライトR1820-40改 空冷1600馬力

「海戦はマスマス混沌へ!」

1月30日昼 山口Pより八幡Pへのメッセージより

詐胸海戦 夜戦編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5418q/>

裏独立アイドル艦隊奮闘記

2011年9月13日17時58分発行